

面倒臭がりな提督

にんじん元帥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これの世界で提督をしていた主人公の『神永隼人』。

彼はとても面倒臭がりな性格をしていたが、その分とても優しく愛嬌があることで知られ、多くの艦娘から愛されていた。

しかし、ある日を境に彼はブラックになった。

一体彼の身に何が起きたのだろうかー。

※不定期更新

目次

プロローグ	【艦娘&主人公side】	1
一章 着任		
邂逅の時	【主人公side】	10
彼との再会	【艦娘side】	20
懐かしの泊地	【提督side】	32
記憶はどこへ	【艦娘side】	45
挿話 一航戦『加賀』	【艦娘side】	
それぞれの念い	【提督side】	74
知らない傷跡	【提督side】	91
消えゆく信頼	【艦娘side】	104
後悔ばかりの日々	【提督side】	117
彼女の眼帯 ①	【提督side】	131

プロローグ 【艦娘&主人公side】

○艦娘side（吹雪）

私は特型駆逐艦一番艦の吹雪。

佐伯湾泊地の工廠で、建造によって生まれた。

提督はとにかく優しい人だった。

私達の事を『大切な家族だ』と言ってくれた。

深海棲艦との戦闘において、中破をした時点で入渠を許可し、戦闘後は温かくて美味しいご飯を沢山食べさせてくれた。

私達は嬉しかった……。

ただただ嬉しかった。

この人に一生ついて行こう……皆、そう思っていた。

だがある日から、提督の態度は急変して行った。

私達に対しての態度、行動がある日を境に突然おかしくなってしまった。

大破しても入渠させて貰えず、提督に入渠の許可を得ようとしても暴言を吐かれ、殴られ、連帯責任として全員、中破や大破した状態で戦場に駆り出された。

そして提督は更におかしくなっていて行き、行動もエスカレートして行った。

何が原因であそこまでおかしくなってしまったのだろうか。

私達には何も分からなかった。……分かりたくなかった。

そしてある出来事が起きた。

今でも忘れられない最悪な出来事が……。

「ーザザツ、こちら第一艦隊旗艦長門！ーザツ、ー大淀！ 提督に伝えてくれ！ さらに深海棲艦を多数確認！この数に……この強さ……姫がおるかもしれない！此方の損害は大破2、中破1、小破3だ！ これ以上の進撃は危険だ！ 今すぐに撤退命令を！」

「ーザー……」

「大淀？ー聞こえているのか!? 今すぐに提督に撤退命令を！」

「ガンツ！ーブツツーザー、……駄目だ。そのまま進撃しろ。……撤退は許さん」

「提督!! 大淀は? ……何故……いや、提督よ! 大破進撃の危険性は知っているだろう!! このままでは全滅だぞ!!」

「安心しろ、お前らの替えは幾らだっている。お前らが全滅したとしても、また替えを建造すればいいだけの事だ」

「だが——!」

「撤退は許さん! もし、撤退を試してみろ、……長門? お前なら分かっているよなあ

「？」

「つく!! —— ザザツ……りよう、かいした。このまま進撃する」

「そうだ。それでいい、お前らの任務は敵の主力艦隊に突貫し、少しでも相手の数を消耗させる事だ」

「そう提督の命令は絶対だ。」

「艦娘である以上、提督の命令には背けない。」

「つく……このままでは本当に全滅しかねないぞ。……っ！どうすれば……」

「長門さんは既に中破状態。」

「その他、大破が戦艦の榛名さんと駆逐艦の潮ちゃん。」

「小破が私を含めて3人、軽巡洋艦の球磨さんに駆逐艦の荒潮ちゃん、そして私。度重なる出撃によつて、全員の疲労状態は既に限界を超えている。」

「長門さんの言う通り、このまま進撃すると全滅は免れないだろう。」

「……っ、な、長門さん……私が敵を引き付けます。……だから、皆さんを連れて、この海域から離脱して、下さい……」

「……!？」

「榛名さんは何を言つて……」

「いくら戦艦だとしても、この数の深海棲艦相手には敵わない！」

喩え高速戦艦であれ大破しては、すぐに追いつかれてしまう！

「何を言っている！大破状態のお前を犠牲にすることは……！」

「だ、大丈夫です！この榛名に任せてください！金剛お姉様の妹として最後まで戦い抜いてみせます！……だから、早く！……ここから離脱を……っう!!」

榛名さんの艦装は動かせない程に損傷が激しく、無理に動かすとさらに悪化してしま
う。……私なら……。

「な、なら球磨が！球磨が囷になるクマ！榛名さんはもう動けないクマ！球磨はまだ小
破だクマ！……時間稼ぎくらいはできるクマ！」

球磨さんまで……

「みなさん！もう話してる場合じゃ！」

……もう目の前に敵が迫って……

「——だ！ わた……」

「もう、——急いでにげ……！」

「どうすれ……」

「……いやああああ」

……ああ、私もここで沈むのか。……嫌だなあ。……また暗く、冷たい所に行くのか。

「——きゅー……ふぶー！——避け！」

次の瞬間、激しい衝撃と爆音と共に私の視界が暗転した。
何も見えない。

痛みも感じない…

私は沈んでしまったのだろうか…

しかし、それは違った。

「な、がと…:さん」

…。

私を庇った長門さんが敵の集中砲火を受けて轟沈した。

…私のせいだ。

私が余計な事を考えてしまったせいで、行動が遅れてしまった。

だから、長門さんが沈んでしまった。

全て…

私のせいだ…。

○主人公 side

海沿いに設置されてあるベンチに男が一人座っている。

男は目を閉じると頭を下げ、自身の指と指を合わせながら深く深呼吸をする。

何度も何度も深呼吸をするー。

……様々な音が聞こえてくる。

ミンミンミンミンミン……

ザーザー……

ヒューー……

蝉の声、波の音、飛行機の音。

それらは俺の心を溶かし、嫌なことを忘れさせてくれる。

……はあ、もうずっとこのままで居たい。

……そして男は目を見開き、空を見上げるー。

あく飛行機雲っばい！ ていうか、飛行機ってどうやって飛んでるっばい？

……駄目だ。久しぶりの休日で海沿いまで来てみたが……

……思考が完全に夕立になっている。

こんな事になった原因としては……

俺が勤務している会社が原因だろうな。

毎日残業ばかり、給料もろくなもんじやない。

休日出勤は当たり前……。そんな会社に俺は勤務している。

毎日上司にはコキ使われ、一つでもミスをすれば怒鳴られる。それがもう『一年半』。まあ、所謂ブラック企業と言うやつだ。

元々面倒臭がりの性格をしていた俺だったが、ブラック企業に勤めている間にやる気というものが完全になくなってしまった。

年に数回あるかないかの休日も寝て一日が終わる。

寝床から起き上がるのも面倒くさくなり、一日中そのまま。という生活が続いていた。

……もう既に、俺の体、心は疲弊しきっていた。

そんな俺だが、一つだけ熱中しているものがある。

……まあ、ゲームの事なんだが。

そのゲームの名前は『艦隊これくしょん』、略称は『艦これ』。

ゲームの説明として艦隊これくしょんは艦隊育成シミュレーションとして旧日本海軍の軍艦を少女に擬人化して育成していくゲームである。

軍艦には様々な種類があり、詳しく知らない人でも人生で1度は聞いたことがあるだ

ろう戦艦を始め、航空母艦、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦、潜水艦などをゲーム内では艦娘として呼び、その艦娘を編成して未知の存在である深海棲艦を倒していくゲーム。そんなゲームに俺は熱中している。

初めこそ慣れないゲーム設定で戸惑っていたが、プレイしていく内に段々とそのゲームの面白さや史実に沿った設定にハマっていき、今では階級が中將になった。

俺も早く元帥になってウハウハしたいなあ…。

まあ、始めた瞬間からずっとウハウハだけどね！

なんちゃって…：

つやべ！…こんな事を言ったら曙に「このクソ提督！気持ち悪いわ！私に近づかないでくれる!？」とか言われてしまうぜ。

ふう…危ない危ない。

…。

…：あ、待って。これ本気でやばいかも。脳が完全にやられてるわ。

「はあ…」

男はベンチの背もたれに寄りかかり、気だるげに空を見上げる。

飛行機雲が徐々に広がって、青色の空に溶け込んで行く。

あれだけ轟音を響かせていた波の音が一斉に静まり返る。

何匹もの蟬が鳴くのをやめて、何処かへ飛び立っていく。

…家に帰るか。

…：…そうして男はベンチから立ち上がり、海を数秒眺めた後、家に向かって一歩一歩進んでいく。

男はこの時まで、自身が艦これの世界に転生して、今よりもさらにブラックな生活を送るなど、考えもしなかったであろう。

…多分。

知らんけど。

一章 着任

邂逅の時 【主人公side】

海沿いからほんの少し離れた場所に少し古びたアパートがあるー。

全体を見渡すと海の潮風に晒されたせいかな塩害が起きて所々に錆が出来ていたー。

このアパートこそ、俺の住処！鎮守府！…である。

築45年経つこのアパートには、俺以外に数人、人が住んでいる。

お隣さんとは、今現在、とても友好的な関係にある。

しかし、その仲良くなったお隣さんに少し不思議な話を聞かされた。

俺の事についてだ。

率直に言う。…俺は一年半前から先の記憶が全くない。

所謂、記憶喪失。

お隣さんによると、一年半前の俺は世間一般で言うトラブルメイカーだったそう。

詳しく事情を聞くと、俺はお隣さんの玄関のドアを叩いたり発狂したりアパートの前で怒鳴り散らしていたそう。

それが毎日。

しかし、ある日を境に俺は突然大人しくなり、今現在のような状態になった。

お隣さんとはこうして仲良くさせてもらってはいるが当時は不気味がられていた。

そりやそうだ。毎日のように怒鳴り散らし、周りに迷惑をかけていた奴が、いきなり人が変わったかのように大人しくなるなんて。

それに加えて、その張本人は記憶が無いと来た。

当たり前だが誰だつて不気味がる。俺だつてそんな奴が隣に住んでいたら怖くて怖くて、常時チビつてしまいそうなくらいだ。

だが、そんなことを言つたつて俺は本当に記憶が無い。

だから俺は一度、病院で検査してもらつたが、先生によると、ここまで重症化していはもう戻らないのかもしれない。と言われた。

自分の名前やブラック企業に勤務しており、このアパートに住んでいる事以外、自分の素性は何も分からない。だから、生活する上で記憶が無いというのはとても大変だった。

…自分が記憶喪失…かあ。

ま、まあ？べ、別に俺はそういうの気にしてないし？…こ、怖くないし？

ほ、ホントだからね？

アタシウソツカナイモンツツ!!

…いかんいかん、俺の中の阿武隈が暴走してしまう所だった。

まあ実際、仕事疲れでそんな事もどうでも良くなり、全然気にしていなかったこともあるが…

そんな事はさておき…

俺は今から艦これをやらなくてははいけない。今日のデイリー任務を消化して、早く寝なくては…また明日も仕事だ。

う〜ん仕事かあ〜…いやあ、怠いなあ。

こんな時、隣に艦娘が居てくれたらなあ。やる気が起きない俺でも、少しは頑張れるんだけど。

もし隣に艦娘が居たら…

「提督？お仕事も大事ですが、自分のお身体が一番大切なんですよ？しつかり休んでください」

大淀がいたらきつとこう言っただけで心配してくれるだろう。

「hey！テートク！紅茶を淹れたから一緒に飲むネー！」

金剛がいたら美味しい紅茶を淹れてくれるだろう。

「このクソ提督！仕事もいいけど私達のこともちやんと考えてよね！」

曙がいたらこう言って、崩壊寸前の俺の体をフミフミしてくれるだろう。

それはそれで…あり。

…よし。

デイリー任務完了つと。これで今日もしつかり提督業に励む事が出来たぞ。

仕事に対してやる気というものは出てこないが、可愛い娘とやれるならこの俺でも頑張れる。これも艦これという素晴らしいゲームのお陰である。

うむうむ。

あつ、そういえば最近、建造やってなかったなあ。

前回した時は戦艦レシピで、

確か鈴谷が来たんだっけ。

だったら今回は、駆逐艦を狙ってみようかな。

まだ出てないのは白露型の村雨と夕立、神風型の…殆ど！来てない。

あとは、特型駆逐艦…一番艦の吹雪…か。

あれ吹雪ってまだ来てなかったのか。

じゃあ今回は吹雪狙いかなあ。

吹雪型はあと一人だけだし。ここで来たら吹雪型コンプリートできるしね。

取り敢えず建造レシピは一番来やすい 30 / 30 / 30 / 30 / 30 でいいか

な。

…よし。あとは建造開始ボタンをポチツとなするだけ。

さあ、来てくれ！お願いします神様！

男がPCの前で手を合わせて神頼みをしていると、急に目の前が明るくなり、部屋の中が光に包まれるー。

男は何が起きたのか分からず混乱していると、密かに声が聞こえてくるー。

「たす…て…、た…けて」

…？今のは、なんだ？…なにか聞こえる。

小さくて分らないが少女の声だ。…たすなんとか？…つて言っていたがなんなんだ。

男がさらに混乱して動こうとするが、体が硬直して上手く動かせなくなる。

そして頭が真っ白になっていく。

なんだ、これは…体の感覚が消えていく。

まるで海の中に沈んでいくような。そんな感覚だ。

…!?

何だこれは。俺は一体どうなって…

…

…。

急に眠気がー。

光に包まれた部屋は数秒後、徐々に元の暗さに戻っていき、普段と変わらない男の部屋が見えてきた。

しかし、その中で唯一変わったことがある。

それは…

男が気絶した状態で倒れ込んでいたことだ。

そして男のPCにはある画面が映し出されていた。

その画面には…

1隻の軍艦が建造され始め、完成までの残り時間が刻一刻と終わりに近づいていったー。

…う、ん…。

こ、こは…俺はどうなったんだ？

取り敢えず、目をあけ…

というか、何で目が開かないんだ。オラツ！開けよ俺の目エ！やる気がないからって目は開けるよ。そこまで重症化してねえよ！

「て…と、てい…」

次はなんだ。ていと…提督？何だこの声は。どこから聞こえて…

と、兎に角：今は視界を確保しなくては。見えない状態じゃ、何が起こっているのかも分からない。

男が視界を確保する為、試行錯誤していると：

徐々に目の中に光が差し込んでいき、ぼやけてはいるが多少は見えるようになった。

まず自分の状態を確かめてみる。

両腕両足共に感覚はないがちゃんとついている。

ふう、感覚がなくなった時は不安に駆られていたが、幾分か安心できた。

次に周りの景色を眺めてみる。

この時には既に、視界は良好。

そのため、男は自分の周りを隅々まで観察してみることにした。

まず、初めに見えたのは乱雑に置かれた書類の山。

俺のアパートってこんなに書類あつたっけ？

まあ、確かに少し散らかってはいたがここまで酷くはないぞ。

多分。

ていうか、少し暑いなあ。

服脱ぐか：

そうして俺は自分の肌に触った。

触ったんだが…

「はえ…う？」

硬い。

俺の肌ってこんなに硬かったっけ。

…あつ、ちよつと意味深な感じになつちやう…／＼／＼。

…じゃなくて！違う違う！今はそれどころじゃない！

俺よ、一旦落ち着けー？ふうー…すうーはあく…

こういう時は深呼吸だ。

目を瞑り、頭を下げて、指と指を合わせる。

この深呼吸の仕方が一番落ち着くんだ。

仕事でよく危篤状態に陥ったときはこうして深呼吸をしていた。

あつ、なんか目から汗がで、出てきますよ。

すうーはあく…すうーはあく…

…さて大分落ち着いてきたぞ。

俺は改めて自分の体に目を向けてみた。

まず目に映りこんだのは、純白なスーツ。肩には金色と黒の装飾が飾つてある。

少し下に視線を移すと、これまた純白な？に自分の手元を見ると手袋をしていた。

黒い鍔が付いた帽子付き。

…。

俺の思考は完全に停止。

——神永隼人がログアウトしました——

「あの…で、ていと…く。だ、だいじょうぶ…です、か？」

あゝ大丈夫大丈夫！

この程度の事は仕事じゃ、いつも経験してるから。

余裕余裕、うん。余裕だよね——！

「あの…」

いやあ、困ったなあ。

幻覚を見るほど、俺はおかしくなってしまったのか。

これは病院で検査しても治らないかなあ。

いやゝ。

ありえないよねえ——。

そう、ありえないのだ。

それは何故か——。

「お前…吹雪な、の…か？」

彼との再会 【艦娘side】

提督はいつからあんな感じになってしまったのだろうか……。

それも今では記憶が曖昧になって、忘れてしまった。……いや、私自身、嫌な記憶を忘れたかったのかもしれない……。

しれ：提督と初めて会ったのは、私が建造された後の着任時での挨拶の時だった。

当時の提督の印象を一言で表すと『おおらかな人』。

私たちと接する時はいつも笑顔で、とにかく穏やかな人だった。……帰還後は、一緒に食堂へ行き、温かくて美味しいご飯を共に噛み締めた。その後は、鎮守府内の皆と間宮さんの特製デザートを食しながら、たわいもない話で盛り上がった……。

それと、提督は少し面倒臭がりな性格をしていた。

そこも含めて、私達は提督を好いていた。

ある者は、上司として尊敬の眼差しを向け。

ある者は、友達として信頼し。

ある者は、恋愛感情を抱いていた。

それが、いつの日だろうか。記憶が曖昧で分からないが、一年半前だっただろうか。

急に人が変わったかのように態度や行動を変えた。

：信じられるだろうか。共に信頼し合い、共に深海棲艦を倒すと誓い合い、共に戦った人が、ある日を境に別人になるなんて……。まるで何者かが提督に憑依しているかのようだったー。

当時の私達は何が起こったのかも分からないまま、提督の無理筋な命令に従っていた。

私達艦娘のこの力は、提督という存在が着任し命令することで、初めてその力を発揮することが出来る。

艦装を展開するにしても、追撃、撤退をするにしても、提督の命令がなければ何も出来ない。

その逆もまた然り、提督からの命令は逆らえない。

艦娘とはそのように出来ている。

だから、戦艦の先輩方や正規空母……。赤城さん達は夜の相手を良くさせられていた。前の提督は、そんな事をする素振りさえ見せなかったのに。

：毎日、誰かの泣き叫ぶ声や提督の怒号が聞こえた。

優しかったあの提督はもういない。

「お前達二人のせいだ！お前らのせいで作戦が失敗し、敵の殲滅はおろか！損害はこち

らの方が上！…どう責任を取ってくれるんだ！」

提督はそう言うと、五航戦の翔鶴さんと瑞鶴さんの頬を殴った。

翔鶴さんは目を瞑り、痛みに耐えていた。その後も何度か、何度か叩かれ、蹴られた。

そして瑞鶴さんは、提督が頬を殴ろうとすると、腕を掴み抵抗した。

しかし、相手は男である。

提督に逆らえない私達艦娘は、あの場ではただの少女だ。

力は圧倒的に提督が上。

「…やめ、て！」

この行為が、提督をさらに激怒させた。

提督は瑞鶴さんの髪を掴み、お腹を殴った。

「…つかはあー！」

その反動で瑞鶴さんは床に倒れ込み、痛みでお腹を抑えていた。

その後も提督は殴る、蹴ることをやめなかった。

あの時、執務室にいたのは旗艦の長門さん、五航戦の翔鶴さんと瑞鶴さん、そして駆

逐艦の私と、荒潮ちゃんと夕立ちちゃんだった。

皆、目に涙を浮かべ、終わるその時を待っていた。

長門さんは自身の唇を血が滲み出すほど噛み締めていた。

私達艦娘は、提督に対して危害を加えないようにリミッター制御装置というものが備わっている。これは、提督が命令をした時点で発動される仕組みになっており、そのため、長門さんは提督に対して対抗する手段がなく、とても悔しかったのであろう。

怒りの矛先を何処に向ければいい。この悔しさはどうすれば無くすことが出来る。

あの時の長門さんの顔は今でも忘れられないー。

私はあの場面で、一体何ができたのであろう。

…。

否、何も出来ない。

何度も言うが、艦娘は提督という存在に対して絶対に逆らえない。

逆らえば罵声を浴びせられ、暴力によって抑え込まれる。

いわば、奴隷。

最初から私達に自由なんてものは無かったのだ。

道具として使われ、欠陥品となったら捨てられるー。

提督は正規空母の先輩方を主に標的としていた。

特に赤城さんと同じ一航戦の加賀さんは、提督に対して反抗的な態度を取っていたため、完全に提督の標的となっていた。

加賀さんは、その冷静沈着な性格を持ちながらも提督に対して反抗的な態度を示して

いた。それは、私達を守るため。

そのため私達、駆逐艦や潜水艦の子達にとって加賀さんは、提督から守ってくれる唯一無二の存在となっていた。

しかし、加賀さんはある日から提督に対して反抗的な態度を取らなくなった。

原因は分からない。

ただ、私達の知らない所で加賀さんは提督に何かされていたのは間違いないだろう。

：助けたかった。

：でも私達にはどうすることも出来ない。

思うだけで何も出来ない。何も変わらない。

だから殆どの艦娘は諦めた。

もうどうしようもないとー。

今日は提督が私に話があると言って急遽、執務室に向かっている。

一体何の話だろうか。正直言つて怖い。：何をされるのだろう。

また殴られるのかもしれない。しかし、私は艦娘。行くしか選択肢は無い。

執務室まであと少し、この先を左に曲がったらすぐそこにある。

夕立ちゃんは言っていたー。

「提督さんはきつと悪魔に取り憑かれてるっばい！だから私が提督さんのことを治して

あげる！」…と。

果たして本当にそうなのかさえ分からない。

が、そうであつて欲しい。あれが本当の提督の姿であつて欲しくない。

潮ちゃんが言つていた—。

「わ、私は今の提督がこつ、怖いです。…前の提督が良かったです。…だから、助けたいです！元の提督が戻つてきてくれるように！ほ、ホントです！」

この願ひも無駄に終わるかもしれない。

でも、信じたい。元に戻つてきてくれるように。

…少しでも信じたい。…信じるしかない。

私達にはそれしか出来ないから—。

私は執務室の前に立つた。緊張して体が震える。

「…っあ…っ」

上手く声を出せない。でも、入るしかない。

…深呼吸だ。こういう時は深呼吸。

目を瞑り、頭を下げて、指と指を合わせる。そして深く吐いて、思いつきり吸う。そして吐く。

すう—…はあ…。すう—…はあ…。

優しかった時の提督がよくやっていた。

最初見た時は何をやっているのか分からなかった。

でも、提督が教えてくれた。

「これは俺独自の深呼吸の仕方だ。吹雪も深海棲艦との戦闘前はいつも緊張するだろう？」

「はい……戦闘前は特に緊張しますね。あつでも、周りのみんなはあまり緊張してるといには見えませんが……特に夕立ちちゃんとか……」

「あはは……そうかそうか！まあ……あいつはあいつなりに、周りの雰囲気を変えようとしてるだろうなあ」

「あはは……夕立ちちゃんらしいですね……ふふっ」

「そ……こ……で……だ！吹雪……お前だけにこの深呼吸の仕方を教えてやろう！特別だぞ！特別！」

「……はい！司令官！ぜひ私に教えてください！」

「よし……では……」

この深呼吸をすると、私は凄く落ち着く。不思議と冷静になれる。

……とても安心する。

……優しい提督が教えてくれたから。

さあ、次こそはー。

私は執務室の扉をノックし、提督に声を掛ける。

「特型駆逐艦一番艦の吹雪です！失礼します！」

…しかしいくら待っても、提督からの返事はない。

もう一度ノックし、声を掛ける。

「あの…しつ、提督！吹雪です…！」

…やはり応答はない。何かあったのだろうか。

私は、扉の前で数分待機した後に「失礼します」と言つて、中を覗いてみる。

まず視線に映つたのは、乱雑に置かれた書類の山。

これは前からそうだ。…提督はおかしくなつてからというもの、書類を溜め込むようになった。前の提督であれば、書類はこまめに処理していた。

提督自身、面倒臭がりな性格だったが大淀さんが秘書艦をしていた為、書類だけはきちんと片付けていた。

こういう所も提督は変わってしまったー。

そうして私は、もう一度「失礼します」と言つて、執務室の中に入る。

恐る恐る提督に近づくと、提督は机にもたれかかっていた。

…寝ているのだろうか。そう思い、声を掛けてみる。

「提督……」

しかし提督は起きない。

音量をもう少し上げ、もう一度言ってみる。

「あの……提督！」

「……っん〜」

すると提督の体が少し跳ねる。

そしてゆっくりと顔を上げていく。怒られるのだろうか。はたまた殴られるのだろうか。

私は少し身構えて様子を伺った。

提督の顔を見ると、今にも怒り出しそうな顔をしていた。

ああ、また怒られる。……そして殴られ、蹴られる。

期待はしてみたものの、やはり提督は提督。

何も変わらない。

……私も諦めるしか……。

私は目を瞑った。迫り来る衝撃に。

……。

……。

しかし、いくら待っても罵声はおろか頬に来るあの衝撃が来ない。提督はいつも頬を殴ってくる。だから、反射的に目を瞑ってしまう。

…。

…来ない。

いくら待っても何も来ない。

数秒しか経っていないだろうが、この間が異様に長く感じられた。

「はえ…？」

今の声は一体…？

恐る恐る片目を開ける。

この部屋には私と提督、二人しかいないはず。

ならば声の主は間違いなく提督だ。

私は提督の方を見る…と彼は自身の体を隅々まで見ていた。

何をしているのだろう。

提督は自身の肩を、？を手袋を、軍帽を確認した後、私の方を見て驚いた表情を見せ

た。

そして固まった。

一体何が起きているのかわからず混乱した。

と、取り敢えず…

私は怯えながらも、声を掛けてみることにした。

「あの～…て、ていと…く。だ、だいじょうぶ…です、か？」

しかし提督の表情は一向に変わらない。

口をあぐりさせたまま動かない。

私も動けない。

またしても長い時間が流れる。沈黙が続く。

これは…

私はもう一度声を掛けてみる。

「あの～…」

すると、提督は少し困った表情を見せた。

こんな表情を見せるのは、優しかった時の提督以来だ。

私の思考が止まりそうになる。

一体何が起きたというのか…。一向に理解が追いつかなかった。

そして提督の次の一言で、私は完全にフリーズした。

「お前…吹雪な、の…か？」

…。

「…はえ？」
…。

懐かしの泊地

【提督side】

俺は今、夢幻の中に居るのだろうか。

であれば、直ぐにこの夢も泡沫の如く消え去るはず…。

何故なら、俺はさつきまでアパートに…。一人で…。

…だがいくら時間が過ぎようと、自分の瞳に映る景色、そして目の前の少女は此方を見つめたまま動かない。そして、俺も動けない。

そんな状況が数分続いた。

「あつ…、あの、提督…話、とは…」

目の前の少女が言葉を発した瞬間、俺の全身から冷や汗が止まらなくなった。

おかしい。有り得ない。

な、何故、俺はこの光景を懐かしく感じているんだ…？

俺は、ここに来たことが…いや…、絶対じゃない！ある筈がない！…夢だ…。

そうだよ！これは夢だ！じゃなきゃ、目の前に映る光景は一体なんだと言うんだ。

俺はこの光景に、自分が置かれている状況に…思わず可笑しくなり、笑ってしまった。

いや、…笑うしかなかった。

「…あ、あは…ははは…」

そして頭の中が真っ白になり、呼吸が上手く出来なくなる。

「…はあつ、…はあつ…、はっあ」

こ、こういう時は深呼吸、深呼吸だ。

すう…はあ、すう…はあ…

「あつ…」

俺が深呼吸をすると、目の前の少女が此方に向けて一歩前に足を出す。

俺はその光景を見てさらに過呼吸になる。

「はっあ…あつ…あつ…はっ…」

もうダメだ。息が…出来ない。頭が、いたい…！汗が…止まらない。…目の前がぼやけてきた。体が…熱い。体の内側から燃えたぎるような熱さが湧き上がり、その熱が全身に行き渡る。

そうして俺は机にもたれかかった後、力が入らず、そのまま床に倒れ込んでしまう。

「つて…提督！」

すると、机の前に立っていた少女が俺の傍に駆け寄ってくる。

そして駆け寄ってきた少女は、俺の体を優しく揺さぶる。

一体、何が起きたというのか。これは夢では無いのか。

そんな事を考えた後、俺の意識は徐々に遠のいていく。

「て、提督……だ、大丈夫……ですか！」

少女が俺の体を揺さぶった後、その小さな手で、俺の頬を優しく撫でる。

俺はその瞬間、とてつもなく懐かしい匂いが鼻腔をくすぐり、そうして俺の意識は完全に暗闇の中へと飲み込まれて行った。

…吹雪。

……。

「……て、く……てい……く」

懐かしい声がするー。

いつも俺の傍に駆け寄ってきては、明るく。そして元気いっぱい話しかけてくれる。…少しドジっ子だが、そんな所もアイツらしい。

懐かしい匂いがするー。

アイツはよく膝枕をしてくれた。その時にほのかに香る、あの時の匂いだ。

俺のワガママによく付き合ってくれた。

頬に少し冷たい感触。

しかし、何故か心地よい。不思議と心が落ち着いてくる。

「し、『司令官』…大丈夫ですか？」

先程までであった、燃えたぎるような熱はすっかり冷め、湧き出てきた汗は、俺の体をさらに冷ました。頭痛も収まり今は絶好調だ。

そして、俺は目を開ける。目眩もなくなり目の前の少女：

…吹雪が俺の頬を撫でながら、こちらを心配そうに覗いてくる。

俺は少し笑って見せた。吹雪に笑って欲しくて。…ただ、それだけなのに…。

…何故か涙が止まらない。

「…しっつ司令官！」

俺とした事が、いけないなつ。…これ以上、吹雪に心配を掛けさせるわけにはいかな。だから、俺は自分の袖で涙を拭い、もう一度笑って見せた。

先程よりもさらに、とびっきりの笑顔で。

「…っひ、ひぐっ…し、しれい…がん…っ」

泣くなよ吹雪っ。いつもの笑顔はどうした！

俺はその姿が少し可笑しくて、また笑ってしまった。

…。

吹雪…。

…俺も泣いてしまうだろうがっー。

その後、どれくらいの間が経ったのだろうか。

俺は吹雪の涙を拭くと、吹雪は俺に抱きついてきた。

それが何故だろうなあ。俺はとてつもなく懐かしく感じた。俺は吹雪と…

昨日も一緒に話を…

…あれ。

昨日、俺は何をしていたんだっけー。

…何も思い出せない。

記憶がない。

「司令官…大丈夫ですか？」

吹雪がそう聞いてくる。

「ふっ…吹雪。…お、俺は昨日…な、何をして、いた…んだ？」

思い出せ、俺。

お前は何をしていたんだ。何を、…一体何を。

「…っ…し、司令官は…な、何も…覚えて、いらっしやらないのですか？」

俺…は。

吹雪は何故、そんなに怯えた顔をするんだ。

物怖じする小鹿のような表情を…。

あつ…。

そして俺は一つの考えに辿り着いた。

「吹雪…お、俺は、…俺が…お前達に何かしていたか…」

「…っそ、それは…」

頼む、教えてくれ…吹雪。

俺はお前達に何かしたはずだ。…じゃなければ、お前の…その表情はなんだ！

他に何が思いつく！

それに…

お前の頬にある、その赤い傷跡はなんだ。

よく見るとそれ以外にも、青い痣が出来ているじゃないか。

その制服もどうした…。何故ボロボロなんだ！

入渠、は…？何故入渠していないんだ…。

「しっ…：しれい、かん…：こ、これは…：その」

すると吹雪は目を逸らし、顔にある傷跡を手で覆い隠した。

まるで何も無かったかのように。隠したがっていた。

…。

俺…は、吹雪。

「…それは俺がやったんだろ？」

察しはついていた。…分かっていた。

全て俺が原因なのだ。

「…！っち、ちがつ…」

吹雪が何か言おうとした瞬間、扉がノックされた。何事かとそちらの方向を向くと…

「提督。航空母艦、加賀です。失礼します」

加賀…。

あいつなら何か、分かるはず。

一体何があつたのかを…。

「はっ、入れ…」

「失礼します」

入室してきた加賀は…。…なにか違っていた。

俺の記憶の中にある加賀とは雰囲気。以前の加賀であれば、もう少し明るかったはずだ。

俺には分かる。元々、加賀は感情を表に出さない。そういう性格をしていた。それ故、ぱつと見、表情が変わつたのか分からない。しかし俺は、彼女と長年この鎮守府で

過ごしてきた。

着任時の挨拶の時、作戦会議、昼食時、たまにはあったが大淀が忙しい時は秘書艦もしてくれた。

…暇な時は一緒に話もした。たわいもない話だったが、俺にとってはその時間はとても有意義で、とても楽しかった。

だから分かる。加賀はこんな表情ではなかった。

「提督…話とはなんですか」

話…？

何の話だ。き、記憶がないんだ。

あるはずの記憶が…俺には思い出せないんだ。

頭の中でいくら考えても、空白が出来ている。

だから、俺の身に一体何が起きていたのかを…俺自身が知らなくては。

「ふ、吹雪…お、落ち着いて聞いてくれ」

この答え次第で、俺はある一定期間の間だけ、完全に記憶がなくなっていると判断できると。

「…は、はこ」

俺はいつから…

「俺がお前達に何かしたのは間違いないだろう。…その、俺はいつからおかしくなった？」

俺の記憶ではお前達と笑顔で話している所しか思い出せない。

一体、何があつたんだ。この一定期間中、俺に…。お前達に…。

何が起きたんだ。

「し、司令官は…その、…やはり覚えていないのですね。…その、司令官がおかしくなつたのは、私も記憶が曖昧でよく思い出せないのですが…、約一年半前から突然おかしくなりました…」

一年半…。

その期間中に俺は彼女らに…。

「提督…話とは何でしょうか？」

加賀…。

ああ、俺はなんて…。なんて取り返しのつかない事をしてしまったのだろうか。彼女らは…俺の『大切な家族』なのに。

「提督…何故、涙を流していらつしやるのでしょうか？」

加賀…すまん。すまん！加賀！

「すまなかつた！加賀…！俺は、俺はお前達に…取り返しのつかない事をしてしまった

！……大切な家族なのに！……すま……ん加賀……吹雪……」

俺は加賀の傍に行き、土下座をした。

これで許してもらえはるはずがない。分かっている。……しかし。

しかし、記憶が！俺にはきおくがああ！

だから教えてくれ！

「俺に何があつた加賀！一体俺は、お前達に……何を、何をしたんだ！教えてくれ！……加賀、……ひぐつ……つ……教えてください、お願い、します……」

「……………」

「加賀……」

俺は涙を流しながら加賀の返事を待った。

何秒。いや、何分も待ち続けた。

その返事が来るまで……。

しかし、返事が来ることは無かった。

俺は加賀の顔を見るため頭を上げた。

……次の瞬間。

俺の頬にとてつもない程の衝撃が来た。

……一瞬何が起きたのか分からなかった。

しかし、考える暇もなく…次の衝撃が来た。

「…つかはあ!」

胸、そして腹部を殴られた。

その衝撃で肋が折れ、肺の中にある空気が一気に押し出され、内蔵にダメージが入り、吐血した。

「…うつがあああ!!」

「…！つちよつ！ちよつと加賀さん！やめてください！…司令官は！司令官は悪くないんです！記憶が無かったただけなんです！」

そう言って吹雪は加賀の腕を止めようとした。

しかし相手は空母。

駆逐艦と空母では力量の差は圧倒的に空母が上。

吹雪は加賀に押し出され、倒れ込んだ。

そして、加賀は縮こまった俺の背中を足蹴りした。

上からそのまま勢いをつけて蹴られた。

「つうがあああ!!」

その衝撃で、俺の背骨は折れた。そして痛みすら感じなくなるくらいに、動けなくなった俺を加賀は何度も踏みつけた。意識が遠のいていく。

「…もう、やめて。加賀さん…もう…」

吹雪：お前は、いつだって優しいなあ。こんな取り返しのつかない事をした俺を庇ってくれるなんて。…だがなあ、吹雪。

…これでいいんだ。…これでいい。

俺はお前達にこれ以上の苦痛を与えていたのだろうか？身体的にも精神的にも…。

記憶はないが、それは間違いない。全ては俺が悪い。…お前達は被害者だ。

だから庇うな。お前も殴るなら殴れ。…覚悟は出来ている。

…ああ、俺はなんて惨めでクソ野郎なんだっ！

…お前は着任時に言ってただろ？忘れたのか？

「今日からこの佐伯湾泊地に着任する事となった…名前は神永隼人だ。よろしく頼む。

…まず初めに、俺はここで宣言する！」

言っただろ!?! 神永隼人!!

「俺はお前達の事を『大切な家族』だと思っている。いきなりどうしたこいつとは思いますが、そこに一切の嘘偽りは無い！俺はお前達を何一つ不自由のない生活、そして将来へと導いていくつもりだ！それが俺ら提督の仕事であり、お前達の上司として、家族としての役目だ。…俺はそう思っている。これから迷惑をかけるとは思いますが、よろしく頼む！」

言ったはずだろ!!

「はあ…はあ…、提督！あなたは…あなたはあ…はあ、はあ…何処まで私たちを…悲しま
せる、つもりなの…」

か、が…すま、ん…。

意識がもう…。

「てい…とく…つひ、…うう…」

加賀はそう言っ、糸が切れたかのように泣き出し、その場にへたり込んだ。

…。

…。

ごめん、な…。

か、が…。

記憶はどこへ 【艦娘 side】

「お前……吹雪な、の……か？」

提督は……何を……

何故、私を怒らないの？……何故、殴らないの？

「……はえ？」

私は訳も分からず、変な声を出してしまふ。

ー。

仕方がないだろう。この一年半、目の前にいる提督は私達の事を道具として扱い、なにか癪に障ることがあれば罵声を浴びせ、当たり前のように暴力を振るってくる。

そういう人だった。

しかし今、この私の目の前に座っている提督は何もして来ない。

それどころか、この執務室の空間が気になるのだろう。

周囲の至る所を見渡した後に、困ったような、驚いたような表情で私を見つめてくる。

私は動けなかった。

瞬きも忘れてしまうくらいに、目の前の光景が信じられない。

…まるで一年半前の時みたいに、提督がおかしくなっている。

あの時も、こんな風に驚いた表情を見せた後、徐々におかしくなっていた。

次はどうなるのだろうか。…もしかすると元にもどつ…いや、期待はもう。

…でも、私…は。

…と、取り敢えず。話を聞かなければ。

「あつ…あの、提督…話、とは…」

私が提督に向かってそう言うのと。

…！

提督は額から尋常では無い程の汗をかき始めた。

その汗の量は徐々に多くなっていき、そのまま机に向かってぼつり、ぼつりと落ちていく。

…提督の目が小刻みに動き出した。

瞬きの回数も増えていき、呼吸も荒くなってきた。

大丈夫…なのだろうか。…一体何が…。

そして提督は一瞬、口を開いた後…

「…あ、あは…ははは…」

突然、笑いだした。

…私は驚いて、後ろにたじろぎそうになった…が、
「…はあつ、…はあつ…、はっあ」

提督が息苦しそうに、過呼吸をし始めた。

顔の色も真っ青になっていくー。

そして、提督の次の行動で、私は心のどこかで確信した。

…っ！

…そ、その…深呼吸は…！

「あつ…」

私は幻覚を見ているのだろうか。

目の前の…、…優しかったあの時の提督がしていた…。

…あの深呼吸だ。

私は気付かぬうちに、後ろに下げようとした足を一步前へ踏み出した。

…私の心の中にある霧が少しだけ晴れたような気がした。

偶然なのかもしれない。まだ怖い提督のままなのかもしれない。

でも、私は…。

すると、目の前の提督は先程よりも荒い呼吸をし始め、頭を抑え込んだ。

そして、声にならないような呻き声をした後に、提督は机にもたれ掛かり、その時の

勢いで体勢が崩れ、床に倒れ込んでしまった。

「つてー……提督ー！」

私は倒れ込んだ提督に向かって、手を差し伸べた。

まだ怖いのに。殴られるかもしれないのに……

でも……、……だつて。

優しい提督が目の前にいるからっ!!

私に、……私達に向かっていつも笑顔を見せてくれる貴方がっ!!

私は提督の体を優しく揺さぶり、必死に呼びかけた。

「て、提督……だ、大丈夫……ですかー！」

提督はまだ怖いままなのかもしれない。

でも、あの時に見せた行動は間違いなく、以前の提督がしていた……っ！

私は提督の頬に手をかざし、優しく撫でる。

すると、提督は安心したかのように、強ばった表情を徐々に緩めていき、呼吸も安定

してきた。

そして、提督の意識がなくなる直前……

「……吹雪」

と、私の名前を呼んでくれた。

間違いない……この、今の提督は……以前の優しかった、あの時の提督だ。絶対にそうだ……だって、だって！

こんなにも笑顔で寝ているんだもの！私の膝の上で！涙を流しながら！私は嬉しさのあまり、涙を流した。

その涙はじわりと頬を伝うと、提督の涙と交わり、共に零れ落ちた――。

あれから提督は、私の膝の上でスヤスヤと眠っている。

こうしてみると、とても懐かしく感じる。

私は、提督が優しかった頃、よく膝枕をしてあげていた。

提督がして欲しいって言うてるから。

最初は恥ずかしくて断っていたんだけど、何度も言われると断りきれなくて……。

結局それからというもの、完全に膝枕は定着化してしまった。

でも、私は嬉しかった。

提督に求められているっていうか、誰にも見せない姿を私だけに見せてきて、甘えてくる提督が凄く愛おしく感じたから。

そんな提督に私は心惹かれて行った。

……。

わ、私は何を考えてるの……。

べ、別にそういう…。変な事じゃない…。し。

…いくら提督がこうして私の膝の上で寝ているとは言え、まだ変わっていないのかも知れないのに。

そんなことを考えていると、提督が少し動いた。

「提督…う…で、提督…」

そういえば、私はいつから彼の事を提督と呼んでいるのだろう。

彼と初めて会った時から、私はずっと『司令官』と呼んでいた。

しかし、いつからだろう。

彼がおかしくなってから、だろうか。

私は司令官とは呼ばずに、提督と呼ぶようになった。

そこに何の意味があるのかは…正直、私にも分からない。

…だけど、今言えることは。

この目の前にいる彼は…間違いなく『司令官』だ。

そこは変わらない。絶対に…。

私は司令官の頬を手で優しく撫でた。

すると、司令官は少し驚かれた。

「し、司令官…大丈夫ですか？」

私が心配して、司令官に呼びかけると…。

司令官はゆつくりと目を見開いていく。

私はまだ怖かった。変わってなかつたら確実に殴られるだろう。

しかし、そんな心配も無駄に終わった。

司令官は目を見開いた後、此方の方を向いて少しだけ微笑んだ。

そして、笑いながらまた涙を流した。

「…しっつ司令官！」

私が司令官に声を掛けると、司令官は自身の提督服の袖で涙を拭き、もう一度笑った。
先程よりも、更に笑顔で…。

…やっぱり、やっぱり！

戻ったんだ…元の司令官に…っ！戻ったんだ！

「…っっひ、ひぐっ…し、しれい…がん…っ」

私は嬉しさのあまり、またしても司令官の前で泣いてしまった。

司令官の前でこんな姿、見せちゃいけないのに…。…でも、涙が止まらないんだもん
…。

司令官は、そんな私を見て、また微笑んだ。

…ふっ…。私も思わず、少しだけはにかんだ。

…ああ、嬉しい…。

その後私は、司令官に涙を拭かれると、元に戻ってきてくれた嬉しさと、恥ずかしさで思わず彼に、抱きついた。

…こうしていると、なんだか安心する。

司令官の暖かき、呼吸、心臓の鼓動を感じられる。

…っ／／／。

いけない、いけない。

そろそろ離れないと…。

そうして、私が司令官から離れると…。彼は何故か茫然としていた。

何かあったのだろうか？？私は気になって、司令官に声を掛けてみる…と。

「司令官…大丈夫ですか？」

司令官はこう言った。

「ふっ…吹雪。…お、俺は昨日…な、何をして、いた…んだ？」

…っ！

司令官は…何も…覚えていなかった、のか？

私達が受けたひどい仕打ちを。彼自身が覚えていないというのか…。

そん、な…何で…！

「っ……し、司令官は…な、何も…覚えて、いらつしやらないのですか？」

私達に罵声を浴びせ、暴力を振るつた事。戦艦や空母の先輩達にした、あの行為を…
そして、…大破進撃をさせて…長門さん…。いや、あれは私の…せ、い。

い、嫌な記憶が…！

もう…忘れたい、のに…っ！

駄目だ…！どうしても…蘇ってしまっ！

すると、司令官が茫然としたまま、私にこう言った。

「吹雪…お、俺は、…俺が…お前達に何かしていたか…」

…私達…、に。貴方…は。

「…っそ、それは…」

司令官は私の顔を、着ている制服を見て、段々と顔色を変えていった。

…っ！司令官は気づいているんだ。私達が受けた、この、傷に…。

私は咄嗟に、顔に残った傷を手で覆い隠した。もう既に気づかれているのに。嫌だ、見せたくない。貴方が今これを見たら…必ず。

「しっ…しれい、かん…こ、これは…その」

全て、自分のせいして…。

「…それは俺がやったんだろ？」

「……っち、ちがつ……」

……。

司令官は昔から、私達に何かあると直ぐに自分のせいにする癖があった。

深海棲姫との戦闘後、私の中破、その他の艦娘達もそれぞれ中破や大破状態で鎮守府に帰還すると、司令官は私達の目の前で「全て私のせいだ。判断が遅すぎた。すまない……」と言って、一人一人に土下座をしていった。

私達は困惑した。

……違うのに。あれは、私の行動が遅かっただけで……。司令官の判断は決して遅くなかった。なにより、あの判断があつたお陰で、私達は助かつたと言っても過言ではない。あのまま進軍していたら、私達はきっと全滅していた。

他の艦娘達もきつとそう思っていただろう。

だからあの時、あの場で、司令官を責め立てるものは誰一人として居なかつた……。だが、しかし……今回の件において……。私は……。

どうすれば……。

すると、突然。

執務室の扉がノックされた。

一体誰だろう……。

私と司令官が扉の方向に視線を送ると…。

「提督。航空母艦、加賀です。失礼します」

加賀…さん。

…っ、司令官！だめ…。

「はっ、入れ…」

「失礼します」

遅かった。

加賀さんは執務室の扉を開けて、私達を見たあと、顔色ひとつ変えずにこう言った。

「提督…話とはなんですか」

加賀さん…。

司令官は記憶がないんだ。だから、話なんて…何も…。

すると、司令官は私に向かってこう言った。

「ふ、吹雪…お、落ち着いて聞いてくれ」

司令官は真剣な眼差しで此方の方を見てくる。

一体、なんだろうか…。

「…は、はい」

「俺がお前達に何かしたのは間違いないだろう。…その、俺はいつからおかしくなった

「？」

…司令官はやはり覚えていない、のか。

…いつから…。いつ、から…。

司令官が…、おかしくなったのは。

「し、司令官は…その、…やはり覚えていないのですね。その、司令官がおかしくなったのは、私も記憶が曖昧でよく思い出せないのですが…、約一年半前から突然おかしくなりました」

そうだ。司令官がおかしくなったのは一年半前…レイテ沖海戦の作戦行動が開始される直前の事だった…。

あの戦いで、長門さんは…。

…っ。今はそんなこと考えても意味は無い！もう考えるな！

「提督…話とはなんでしようか？」

加賀さん…司令官は…。

私が司令官を心配して、顔を伺おうとすると…。

…泣いている!?!どうして…。

「提督…何故、涙を流していらつしやるのでしょうか？」

…責めているんだ。自分のせいでこうなったのだと。

司令官はそういう人だからー。

すると、司令官が加賀さんの方へ向かって行き、いきなり土下座をした。

ああ、やつぱり…もう。やめてよ…。

「すまなかつた！加賀…！俺は、俺はお前達に…取り返しのつかない事をしてしまった
！…大切な家族なのに！すま…ん加賀…吹雪…」

司令官はそう言って、泣きながら加賀さんに向かって土下座をし続ける。

一方加賀さんは、表情を変えずに、司令官の方をずっと見下している状況。

「俺に何があつた加賀！一体俺は、お前達に…何を、何をしたんだ！教えてくれ…！加賀、…ひぐつ…！…教えてください、お願い、します…」

…司令官、やめてよ。そんなに自分を…。

「……………」

「加賀…」

それから何分経過したのだろうか。

私は、その場の空気に圧倒されて、動けずにいた。

加賀さんの表情は一向に変わらない。

…執務室、この空間には司令官の嘆き声しか聞こえない。

すると、司令官が加賀さんの顔を見るために頭を上げる…と。

ドスツ

一瞬の出来事で私には何が起こったのかわからなかった。

加賀さんは司令官の頬を思いつきり殴った…？

「…っかはあ！」

そして、何が起こったのかを理解する前に加賀さんは、司令官の胸、そして腹部を殴った。その衝撃で、ドスツという鈍い音と共に司令官は吐血した。

「…うっがあああ!!」

…っ!!

司令官…加賀さん！幾ら何でもやりすぎだよ…私が、私が止めなきや!!

「…っちよっ…ちよっ…ちよっ…と加賀さん！やめてください…司令官は！司令官は悪くないんです！記憶が無かっただけなんです！」

そうだよ！司令官は記憶が無かった！だから、悪く…な、い…の…に…!!

私は加賀さんの腕を掴み、必死で止めようとした。

だがしかし、その抵抗は無意味だった。

考えてみればすぐに分かる事だ。

相手は空母…。私は駆逐艦…。

どちらの方が力が強いのか、と問われれば。

明らかに空母の方が強いに決まっている。

私の腕は簡単に跳ね返され、体を床に叩きつけられた。

その衝撃で、私の体も少しだが損傷し、動けなくなった。

そうして、私はただ司令官が加賀さんに殴られ、蹴られている所を見ているしか出来なくなつた。何度も、何度も加賀さんは司令官の背中を蹴り、その度にドスッ、ドスッという鈍い音が響いて来る。あの衝撃では骨折は免れないだろう。もしかすると…死んで…。

「つうがあああ!!」

司令官は、その激痛からか耳鳴りが起きるほどの叫び声を発する。

…い、やだ。嫌だよ! やめてよ! 死んじやう! 司令官が死んじやう!

司令官の顔を見ると、口から大量の血が噴出して、段々と意識が朦朧として無表情になつていた。

やだ…。死んじや…。嫌だよ…。司令官…。

「…もう、やめて。加賀さん…もう…」

私は動けなくなつた体を、無理にでも動かそうとする。

しかし、腕に、足に力が一つも入らない。

あのままでは、本当に死んでしまう。何としても加賀さんを…。

…!

司令官の方へ向かうため、もう一度、彼の顔を見る…すると。

司令官は私に向かって笑顔を向けていた。目は、痛みで開けられないのか閉じたままだが、口角を上げて微笑んでいた。

し、しれい…かん…。

私が驚き、呆然としていると。

司令官は微笑んだ表情を変え、次に歯を食いしばり、後悔をしているかのような表情になった。

…きつと、自分の行いを悔やんでいるのだろう。

私には分かる。司令官は…誰にでも優しく、誰にでも元気に接していた。時には、厳しい時もあつたが、それでも私達は司令官について行つた。

それは、彼が信頼に足る人物だったからだ。

それが、今はどうだ。

自分で築き上げた信頼関係を壊し、その艦娘からは殴られ、蹴られるのだ。悔やんでも悔やみきれないだろう。

ドスツ、ドスツ、ドスツ

加賀さんはいつまでも背中を蹴り続ける。

ああ、もう…駄目だ。司令官は…死んでしまう。

私とその光景に絶望し、途方に暮れている…と。

いきなり、鈍い音が消えた。

…？ 一体、何が…。

私は何が起こったのか、加賀さんの方を見ると…

…っ！

加賀さんは目から涙を流し、哀愁を漂わせていた。

私は何事かと戸惑っていると、加賀さんはこう言った。

「はあ…はあ…、提督！あなたは…あなたはあ…はあ、はあ…何処まで私たちを…悲しませる、つもりなの…」

加賀…さん。

…きつと、彼女も彼女なりに司令官の事を…。

「てい…とく…っひ、…うう…」

加賀さんはその場にへたり込み、そのまま司令官の方へ手を伸ばし…彼女は泣きながら、司令官の手を優しく握ってこう言った。

「はあ…はあ…、てい、とく…。もう、絶対に離さない…から、はあ…うっ…、だから、

提督も、私達の事を離さないで…。絶対に…。うぐっ…」

司令官は既に意識が無い、はずなのだが…彼は加賀さんの手を握り返した。まるで、加賀さんの言葉に返事をするかのようにー。

私が茫然と、その光景を見ていると…。

突然、扉が開かれた。

「何事だ！」

入ってきたのは、軽巡洋艦の天龍さん。そして、駆逐艦の潮ちゃんだった。

天龍さんは入ってきたと同時に、その光景に啞然としていた。

まあ、そうなるのも無理はないだろう。

入ってきて、まず視界に移るのは、血を流して倒れた司令官と司令官の手を握り、泣いている加賀さん。そして、倒れて動けなくなった私。

潮ちゃんも執務室の扉の間隙から、怯えながらこちらの方を見ていた。

外が段々と騒がしくなってきた。

きつと、先程の司令官の叫び声と鈍い音、そして、加賀さんの叫び声が鎮守府内に響き、皆が気づいたのだろう。

私は疲れからか、体の力が一気に抜けてその場に寝そべった。

…駄目だ。私、も…意識が…。

そして私は最後に、司令官の顔を見た。

彼は吐血しており、表情は少ししか分からなかったが、私が見た限り、とても安心したような表情だったー。

挿話 一航戦『加賀』【艦娘side】

私は大型航空母艦、加賀…。

栄光の第一航空戦隊、その主力を担う。…はずだった…。

私と神永提督が出会ったのは、4年前の春。

前任の杉原提督が階級昇進の為、日本における四大鎮守府の一つに数えられる佐世保鎮守府に異動した後、彼はその後任として佐伯湾泊地へと着任した。

着任時での挨拶は、私達艦娘にとって衝撃的な印象を与えた。

…彼は、威厳が全くなかった。

他の提督と比べるのも烏澁がましいとは思うが、彼は若すぎた。

日本の鎮守府、泊地に着任している大体の提督が若くても40歳や50歳の威厳ある者が多い印象の中。

彼は、当時26歳だった。

20代で提督になるというのは、極めて異例な事。

私達は戸惑いを隠せなかった。

彼の話によると、我が日本は年々提督の素質を持つている人間の数が減少傾向にあ

り、日本の各鎮守府を纏めている大本営が緊急招集を行い、人手不足となった泊地などに若者を含め、着任させている。との事だった。

それほどまでに、日本の海軍は追い詰められていた。

元々、提督の素質を持つ者はそれほど多くはなかった。

提督の素質というのは、まず第一条件として、妖精が視認できること。

次に、指揮系統が優秀であること。

そして、艦娘とのコミュニケーションが十分にこなせること。

私達艦娘とのコミュニケーションはとても大事である。

コミュニケーションが上手くできない場合、いざと言う時に命令を出せなかったり、艦娘との信頼関係を築く事もできない為、コミュニケーション能力は必須であると言える。

∴話を戻そう。

そうして着任してきた提督は、私達の事を『大切な家族』だと言っていた。

当時の私は、彼の発言の意味が全く理解出来なかった。

艦娘というのは、かつて軍艦として国を守護していた物が魂を宿し、深海棲艦という未知の存在に対して対抗する為、再度この世に生まれてきた。いわば、兵器だ。

その艦娘に対して『大切な家族』と言うのは、甚だおかしな話だった。

しかし、彼はこうも言った。

私達を何一つ不自由のない生活、将来へと導いていく。それが提督の仕事であり、上司として、家族としての役目だ……。

私は何故か、この発言に納得してしまった。

この世から深海棲艦という存在が居なくなつたとして、私達艦娘はどうなると思う。そのまま艦娘として存在するのか……。それとも役目を終えて、深海棲艦のように消え去るのか……。

それは分からない。

だから、提督が言っている『将来』というのがいつなのかは不明だが、私の勝手な解釈では、きっと彼は私達にこう言っていたのだろう。

「お前達が深海棲艦と戦っていない時間はせめて、何一つ不自由のない生活を送って欲しい」……と。

それが、上司として、家族としての役目だ……と。

だから、私は彼……提督を、上司として信頼することにした。

彼が着任してきて一年が経過した頃、佐伯湾泊地の艦娘達は以前よりも活気に満ち溢れていた。

ある者は、鎮守府内で追いかけていたり、ある者は酒を嗜んでいた。

果たして、これは軍隊としていい事なのか…。

私は疑問に思った。

しかし提督はこう言った。

「俺は、お前達に自由を実感して欲しいんだ。軍隊という規律に厳しい集団の中で、自由というのはあまり実感出来ない。だからせめて、戦闘前や緊急時以外の時は少しだけ羽目を外して生活して欲しい。…まあ、あいつは外しすぎだがな… 隼鷹…」

そう言つて、提督は酒が入った瓶を直飲みしている軽空母、隼鷹の所へ行つた。

…提督は私達のことを第一に優先して考えていた。

…私は少したが、それが嬉しく感じた。

そして、一年半前のレイテ沖海戦が開始される直前に…。

…それは突如として起きた。

その日、私は提督の秘書艦として執務室で彼の書類を纏めていた。

いつもは、艦隊旗艦である大淀が提督の秘書艦として彼の傍に居るのだが、今回は大規模作戦前という事で、別の任務を任されており、私は、提督が記入した書類を各項目に分けて纏める作業をしていた。

作戦前という事で、普段よりも書類の数が多く、休む暇もなく二人で処理していた…。

その途中の出来事だった…。

提督が気絶した。

私は突然の事に驚き、提督の傍に急いで向かおうとした、…が。

次の瞬間、提督は驚いたような表情で起き上がり、私に向かつてこう言った。

「おい…（っ）、（っ）はどこだっ!!」

…!?

私は何が起きたのか理解出来ずにいた。

そして、私は提督の異変に気付いた。

目の前に居る彼は先程まで、一緒に作業をしていた時の提督とは別の雰囲気を身に纏っていた。

提督は、何か…イライラしていた。

顔の表情も先程とは異なり、眉間に皺を寄せて、明らかに怒っていた。

一体…何が起きたのだろう。と思い、提督に話しかけた。

「提督…どうかしましたか?」

すると、提督はいきなり私の事を殴った。

…っ!

…て、提督、に…殴られ、た?

私は、いきなりの事にわけも分からず頭が真っ白になった。

…痛い…。頬が痛い。ジリジリとした痛みが私の頭を更に混乱させる。そして、提督はこう言った。

「…おい！立て！…ここは何処だ！」

何処つて…ここは…。

「…ここ、は…執務室…です、が…」

私は当たり前前の事を言った。

私達が居るのは、執務室。それは間違いない。

しかし…

ドスッ

何故か、また殴られた。

次は腹部を…。

私は痛みで退き、その場に倒れ込んだ。

すると、執務室の扉がノックされた。

…誰？

「司令官！吹雪です！失礼します！」

特型駆逐艦の吹雪…！

駄目！今入ってき…

…間に合わなかった。

入ってきた彼女は、唾然としていた。

怒っている提督、そして腹部を抑えて倒れ込んでいる私。

彼女は苦笑いを浮かべ、こう言った。

「…あつ、あの…、こ、これは、一体…。し、司令官？…加賀、さん…？」

そして次の瞬間、彼女も殴られた。

…！

殴られた彼女は、執務室の扉に叩きつけられ、ドンツという大きな音を立てた。

そうして、提督は怒鳴り声を上げた。

「お前らっ！俺に向かって何だその態度は！…連帯責任だ。戦場に行つてこい！」

…これが全ての始まりだった。

その日からというもの、提督は私達の事を道具として扱い始めた。

私達は何が起きているのかも分からないままレイテ沖海戦、大規模作戦が開始され、

その時に提督が気に入らなかつた艦娘は戦場に駆り出され、轟沈するまで何度も出撃させられた。

私達は皆、疲れ果てていた。

度重なる出撃、相手は深海棲姫。

その為、中破や大破をする艦娘は絶えなかった。

しかし、提督は入渠を許可しなかった。

その代わりに言われるのは…

「何故、負けた！…この役立たずどもめ！連帯責任だ！戦場に行つてこい！」

…その繰り返し。

そして、夜には…

「おい！加賀！…後で執務室に來い。これは命令だ」

提督は不気味な笑みを浮かべ、一言。

命令通りに執務室に向かうと…。

「お前さあ…俺に対してちよつと反抗的すぎやしねえか？…あ？なあ、おい。…ふつ…、

まあいい。今から分かせてやるから感謝しろよ？」

そう言つて、私は犯された。

何度も…何度も…。

それでも、私は提督に対して反抗的な態度を見せた。

それは、他の艦娘達を守るため。特に駆逐艦や潜水艦の子達なんかは提督に対して怯

えきつてしまつて、一部の子は部屋から出てこなくなつた。

だから、私が守る。

…そのはずだったー。

いつの日か、私は提督に対して反抗できなくなった。

その原因は、提督に言われたこの一言。

「…加賀。もういい加減にしねえか？…このまま反抗し続けて、お前の大切な赤城がどうなつても知らねえぞ…？」

…っ！

あ、赤城さん…は、か、関係ない！

「…や、やめて。赤城さんは…」

「だったら…なあ！…もう反抗すんなよ？」

「…はっ、はい」

私は反抗できなくなった。

赤城さんは私にとって、命よりも大切な人。

一航戦の誇りを持って、誰よりも勇ましく、誰よりも優しいあの人を…提督になんか…。

しかし、私は結局赤城さんを守る事は叶わなかった。

「あく、そろそろお前とやるのも飽きてきたわ。…次は赤城にするかあ」

その時、私の中から一航戦としての誇りは完全に消え去った。

…もう全てがどうでも良くなった。

ああ、…早く自由になりたい。

提督はどうして…。

…私は考えることをやめた。

提督に従う。ただ、それだけでいい。そうしたら…いつか、あの暗い海の底へ…。

それぞれの念い 【提督side】

…ここは、どこだ？暗くて何も見えない。

体が…、冷たい。…何か、不穏な空気がする。

俺は…、死んでしまったのだろうか。

まあ、自業自得だよな。…はあ…。

俺は、一体何がしたかったんだ？

あいつらに、「必ず一緒に深海棲艦を倒そうな」とか言つといて、自分が裏切つてどうする？…で？、行き着く先が、その誓い合つた艦娘に殴られて、蹴られて、それで死んで。…これで終わり？…へっ！クソすぎて笑えもしねえよ。

…。…ああ、悔いしかねえなあ…。

まだ、あいつらと楽しい思い出作りをしたかったなあ。

…ケツコンカツコカリ、もしてないし…。

ああ！マジで俺は何をやつてんだよおおもおお！！

まず記憶が無いってどういう事だよ…！記憶喪失ってか？何だよそ…

「…シズメ」

すると、突然謎の音が頭に響いてくる。

…！な、何だ！いきなり！…どこから聞こえて…。

「…ゼンブ、オマエ、ノ…セイ、ダ…」

暗くて見えんが…、あの声からして、深海棲艦か…？

…ここはどこだ？…俺は何処にいる？

すると突然、潮風と共に硝煙の匂いが俺の鼻を突く。

…硝煙の、匂い？どこからこの匂いが…。あの声と何か、関係があるのか？

辺りを見渡すも、声の主は視認できない。

それでもその声は、さらに憎悪を込めて言ってくる。

「…ユルサナイ、ユルサナイ…ワタシヲ…ワタシタチヲ…アナドルナヨ…」

すると、周りの全方位から泣き声…呻き声…怒り声…が聞こえてくる。

その声全てに、憎悪の念が込められていた。

俺はその声を聞くことしか出来なかった。…何も出来なかった。

そして次の瞬間、俺は目を覚ましたー。

閉じた瞼の中に、光が差し込んでくる。

ここ、は…。俺は、死んだのでは…。先程の声は…

一体…。

そんなことを考えていると…。

自分の指に暖かい感触があるのに気付き、その方向を見ると誰かが吐息を立てて眠っていた。あれ、は…。

「…て、いとく」

加賀…。

見ると、彼女は目から涙を流していた。その表情は、とても悲しそうで、とても寂しがつっていた。

ごめんな、加賀。俺は…お前達に、どのくらいの苦痛を与えていたのだろう。

…それは、多分。俺には想像出来ないくらいの…。

はあ…。

自分が情けない。記憶が無いとは言え、俺はお前達に悪辣な行為をしてきたのだろう？それは、お前達を見ていれば直ぐに分かった。

…顔にできた痣、汚れた制服、そしてお前達の表情や雰囲気。

それだけで、これは俺の仕業なのだ…理解することが出来た。

俺は指先を動かす。

彼女の、ベッドから今にも落ちそうになっている手を握ると、俺はその手を優しく包み込む。

あの時、微かに聞こえていた。

加賀の悲痛な叫びが……。あの泣き声が……。

だから今度は、絶対に離さない。彼女から握られたその手を、絶対に離すものか。俺はそう心に誓うと、もう一度眠りについたー。

それから数時間後、俺は再び目を覚ました。

その時には加賀はおらず、代わりに天龍と吹雪、そして潮が居た。

彼女は、俺が意識を失っている間、交代交代で身の回りの世話をしていたそう。

……本当に情けない。

そうして俺は、まず自分の容態を聞いてみることにした。

……まあ、それは酷いものだった。

あと少し治療が遅ければ、俺は確実に死んでいたと言う。

……俺は、彼女らに助けられた。何故、俺は……死ななかつたんだ。

彼女達にとつて……俺は、裏切り者。断じて許されない行為をしてしまった。

すると、吹雪がこう言った。

「し、司令官！そんなこと言わないでください！……死ななかつたなんて、悲しいこと言わないでくださいよ！」

俺はいつの間にか、自分の心の声が漏れ出ていたようだ。

だが、しかし……。俺は……

「て、提督……わ、私は提督が戻ってきてくれて、嬉しいですよ……だ、だから……その、……笑ってください……私は、笑っている提督が、す、す、すすきききいいい……」

「おっ、落ち着いて！潮ちゃん！」

笑って……か。

……ふふつ。

俺はもう笑っているよ、潮。お前達を見ているだけで、俺は自然と笑顔になれるんだ。吹雪と潮は俺の方を見ると、彼女らも俺の表情を見てか、可笑しくなったのだろう。二人で笑い合った。

「おい……提督……。記憶がないって言うのは、本当か？」

すると、天龍が部屋の窓を開けながら、そう聞いてくる。

天龍を見ると彼女もまた、所々に傷が出来ていた。

「……ああ、本当だ。……本当に、何もかも……。……思い出せない。」

記憶……。俺にはお前達の元気な姿しか思い出せないんだ……。

……だが、現状はこの通り。俺は彼女らに手を出してしまった。それは変わらない。……記憶が無かった。だから、許される。なんて事にはならないだろう。

俺は果たして、どうなるのだろうか。退役は……免れない。……軍法会議で処されるか

...

そんな事を考えていると…。

「…そうか」

天龍はそれだけ言うと、部屋の扉に向かって歩いていく。

彼女を見ると、とても暗い顔をしていた。

…天龍も、か。…あいつも俺のせいで変わってしまった…。

俺は彼女を引き留めようとしたが、口が開く前に彼女は、部屋の扉を閉めて去っていった。…俺は何も言えなかった。謝罪の言葉さえ言えないのかよ…。

そして、少しの沈黙の後、俺は吹雪達に改めて事の顛末を話してもらった。

俺がどのようにして変わったのか、そして俺が彼女達にした事を…。

…俺は全てを聞いた。

その後、俺は二人を見届け、この部屋には一人。

…俺は、あれからずっと放心状態になっていた。

俺の頭の中で、艦娘の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。それが永遠かと思う程に…。

記憶が無いはずなのに、体はあの感覚を覚えている。

殴った時、蹴った時。その感覚が艦娘の悲鳴と共に甦る…俺はこの感覚に嫌気がさし、思いっきり叫んでしまう。

「ううう……あ “ああ” ああ “あ!!”」

俺は……！おれはあ……！なんて事をおお……！

無意識のまま拳に力が入り、掌から血が滲み出てくる。しかし、痛みは無かった。その代わりに感じるのは怒り。頭に血が上るのが分かる。俺は自分に腹が立っていた。腸が煮えくり返る程、自分が憎い！

すると、コンコンコンつと扉がノックされる。

その瞬間、ふと我に返った。

つ……俺としたことが……これじゃあまた、吹雪達に怒られるじゃないか。

落ち着け、深呼吸だ……。すうー、はあく。すうー、はあく。

次に俺は扉の方向に視線を移す。

そして、少しの間を空けて入ってきたのは……。

「……て、提督」

加賀だった。

彼女は下を向いたまま、少し震えた声で俺を呼ぶ。

吹雪達から聞いた。俺は特に加賀に対しての暴言、暴力が激しかったと。

彼女の顔を見ると、吹雪や潮、天龍よりも痣の数が多いことに今更気付く。

「……加賀。その、……すまん。……俺は、どうかしてた」

加賀が狙われていた理由は、俺から他の艦娘達を…

特に駆逐艦や潜水艦の子を守るために。その為に、必死に抵抗していたと聞く。

それ以外にも俺は彼女に…俺は、…っ！

収まっただけの怒りが、また湧いてきた。冷静になろうとしても、それ以上に怒りが抑えられない。

俺は下を向いてシーツを掴み、歯を食いしぼる。握られたシーツは純白な白色から、徐々に赤く染まっていく。

すると突然、俺の視界が暗くなる。何事かと頭を動かそうとしても、動かせない。…俺は、加賀に抱きつかれていた。少しの驚きの後、微かに香る懐かしい匂いと安心感で俺の怒りは収まる。

加賀は、シーツを掴んだ俺の手の上から自身の掌を重ねる。

彼女の体は小刻みに震えていた。それでも俺から離れようとしなない。

そして、加賀はこう言った。

「て、提督…、その。…あまり自分ばかりを責めないで」

震えた声のまま、加賀はもう片方の手で俺の頭を優しく撫でる。

シーツを掴んでいた手の力がすうっと、抜けていく。

…だが、加賀。…これは全て、俺の責任であって…。

記憶が無いというのは言い訳にもならない。彼女らにした行為は全て俺の責任。俺は加害者で、艦娘は被害者だ。

…俺は、自分を責める事しか出来ない。

他の艦娘達も、きつとそう思っているだろう。

俺は裏切った。艦娘達からの信頼を自分で切り捨てた。

だから…っ！

「ごめんなさい…。貴方が苦しい時に気付いてあげられなくて…」

か、が…。

違うんだ…。加賀。俺、は…お前達に…。

「提督…。私は、…貴方の事を信頼していたの。あの時の…挨拶の事…、覚えているかしら。私はあの時からずっと、貴方の事を上司として、信頼していたの。…私、…いや、私達は…貴方が好きだったの」

俺は、どうする事も出来なかった。加賀の、…彼女の念いを聞くことしか出来なかった。

…挨拶の時、か…。俺はあの時から、この佐伯湾泊地の提督となった。

初めはどうなる事やらとは思った。こんな面倒くさがりの性格をしていて、艦娘達に迷惑を掛けてしまうのではないかと、心配していた。

しかし、彼女らはそんな俺に対して、文句も言わず接してくれた。

俺が、書類を片付けていなかった時に大淀が叱つてくれて、「一緒にやりますから、提督も頑張つて下さい」と言つて、徹夜してまで手伝つてくれた。

俺が、起きるのが面倒臭いと言つて寢室に籠っていると「提督、加賀です。もうマルハチマルマルですよ。起きて下さい。提督、頭にきました。」と言つて、加賀が扉をぶち破つた時。

別の日にも、「提督!?早く起きなさい!いつまで寝ているつもり?爆撃するわよ!!」と言つて、瑞鶴が扉を破壊した時。

あれも、全て俺のためにやってくれていたと思うと…。

…本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。今更、何を言うかとは思ふが…、俺は、本当に彼女らに助けられて来た。

その艦娘達に、俺は…。

「…だから、提督。…貴方が良いのなら…その、もう一度、やり直しません…か」やり直し…。果たして今の俺にそんな資格があるのだろうか。

俺は艦娘を裏切つた。そんな俺にもう一度、やり直す。

なんて事が果たして許されるのだろうか。

上からの報告はまだ来てない。俺がこれからどうなるのかなんて…まだ分からない

のに。

「加賀…、俺は、…もう…」

この泊地には、…居られない。

ここにいれば、きつと…。またお前達に、…。

「やく、そく…。覚えていますか。私に向かつて「絶対に離さない」…と、貴方は言ってくれました。あの時、私は…とても嬉しかったのですよ？」

約束…？ああ、加賀が眠っていた時の事か…。…そうだ。…ああ、そうだよ。俺は絶対に離さないと、あの時お前に誓った。

「…私は、貴方が怖かった。毎日、毎日…貴方に怒鳴られて、殴られて、蹴られて…。抵抗はしてみたものの、意味はなかった。…そして私は全てを諦めていました。赤城さんを守れなかった時から…。ずっと。一航戦としての誇りは何処かに消え去っていました。そして私は…あわよくば、このまま海の底へと沈みたい。なんて思っていました。…そうすれば、この地獄から逃げられる、と…」

…。俺は…そこまで、彼女達に。

不甲斐ない自分を恨みたい。そこまで追い詰めた自分を…。

「…でも、貴方は戻ってきてくれた。それがどんなに嬉しい事か。…提督、…約束は絶対です。貴方がこれから…どうなるのかは分かりません。そして、それは私も同じ。…私

は貴方を殺しかけた。：艦娘は提督に対して、危害を加えないようにリミッター制御装置が備わっています。私が貴方を殴った時：そのリミッターが外れたんです。それが何故なのかは、分かりません。：が、私は結果的に貴方を殺そうとしました。そうすれば、この泊地の艦娘を助けることが出来る。赤城さんにもう二度とあんな辛い思いをさせることない：と。」

加賀は悪くない：。絶対に悪くない。

そこまでした俺が原因だ。俺は別にどうなつてもいい、だがしかし！

：お前は！

「加賀：。俺がこれから先、どうなるのかは分からない。だが、約束は約束だ。それは絶対に守る。結果がどうであれ、お前達にはもう辛い思いはさせたくない。だから、全て！俺に罪を：」

次の瞬間、俺の頬が叩かれた。

少しの痛みはあつた：。が、ただそれだけ。あの時のように、気絶するような程ではなかつた。

俺が呆気に取られていると、加賀は泣きじやくつてこう言った。

「それじゃあ、意味ないじゃないですか：：：貴方が私の罪を被つたら、私は今度こそ、一航戦としての誇りが無くなつてしまう。赤城さんを、この泊地にいる艦娘全員の事を

裏切つてしまう…。」

加賀…。

俺にはもう、どうすればいいのか分からないんだ。

自分が果たして約束を守るのかさえ分からない。加賀が居なくなれば、俺はどうしたらいい？…それこそ意味がなくなるじゃないか。

「すまん…加賀。少し、頭を冷やしたい。今の俺では、お前の期待に沿った回答は出せない。…もう少し、考えさせてくれ…」

俺がそう言うと、加賀は「…はい」とだけ言つて、部屋を退室する。

そして、また一人の空間が出来る。

…汗が吹き出る。

着用している服から、包帯から汗が染み出て、そのままシートへと染み込んでいく。

俺の頭は混濁していた。色々な事が起きた。…起きすぎた。そして、これから先、色々な事が起きる。…どうすればいい？上からの報告次第で、俺はこの泊地からは居られなくなる。そうすれば、加賀との約束は無駄になってしまう。

そもそも、加賀はどうなるんだ。…解体か？それとも、別の鎮守府か泊地に…。

どちらにせよ、最悪な結末は避けられない…。

俺は頭を抱える。

自分にはどうする事も出来ないと分かっているくせに、解決策を導き出そうとしている。

すると、コンコンコンと扉がノックされる。

入室してきたのは、吹雪だった。

彼女は、なにか焦っていた。何かあったのだろうか…。

「し、ししし司令官…あ、ああの、その…えつ…と！」

俺は一旦、吹雪を落ち着かせる為に、深呼吸をさせた。

俺が唯一、独自の深呼吸を教えた相手である彼女は、俺の言う通りに深呼吸をすると、段々と落ち着きを取り戻した。

そして、俺が「何かあったのか」と彼女に問うと…。

「先程、大本営から通達がありました、その内容によると…」

俺は彼女から受けとった通達書。その内容を見て、驚愕した。

…有り得ないだろう。…何をしたらそういう結果になるんだ。

内容はこうだった…。

「佐伯湾泊地現提督、神永隼人。大本営より通達。貴殿の処遇、又は航空母艦、加賀の処遇について。貴殿のこれ迄の件において、記憶の喪失、心神喪失状態であった為、被告人としての重要な利害を弁別し、それに従って相当な防御をすることのできる能力を欠

く状態をさすものとすれば、記憶喪失で今回の件のことを全く認識できないと見なし、今回の公判は停止、確立されない。よって、貴殿にはこれまでと同じ、佐伯湾泊地での任務遂行を通達す。次に、航空母艦、加賀の処遇について。加賀においては、リミッター制御装置が解除された際、自身の防衛システムが働いたと見なし、今回の公判は停止、確立されない。よって、航空母艦、加賀にはこれまでと同じ、佐伯湾泊地での任務遂行を通達す。以上。」

…との事だった。

果たしてこんな事があっていいのだろうか。

いくら記憶が無いとは言っても、免責は免れないだろうとは思ったが…。

大本営は一体、何を考えているのだろうか…。

…まあ、考えられるのは、提督不足か？

提督になりうる人材が少ないが故に、多少の問題を起こしても許されるのだろうか。いや、しかし…俺は、多少とは言えない程の問題を起こしたはずだが…。

そこまで海軍は、…我が日本は追い詰められているのか…。

だからこそ、加賀の件においても解体はせずに任務遂行を続行させた…？

「あ、あの…、それで…司令官は、どうしますか？」

吹雪が一言問う。

…どうするか、ねえ。まあ…

「やるしか、ない…よな…」

それ以外にどうしろと言うのだ…。

大本営からの命令は断りきれない。というか、断れない。強制である。

ならば、やるしかない。加賀の言う通り、もう一度、やり直す。

喩え今回の件が無かった事として水に流されたとしても、艦娘達が受けたこの傷は治っていない。だから、俺自身がその傷を癒さなくてはいけない。

どんなに、酷い目にあつても真摯に受け止める。… 自分の尻拭いも出来ないような無責任野郎にはなるな！

拳に力が入り、今度はやる気に満ちた力が湧いてくる。

「よし…：…次は絶対に離さないからな、吹雪！」

そう言うと、俺は腕を空に掲げる。

確か、挨拶の時もこうしてたっけ…。懐かしいなあ。

「し、司令官…：…うぐっ…：はい!!絶対ですからね！」

吹雪は泣きながらも、目をキラキラさせる。

そして、敬礼をして最後にこう言った。

「おかえりなさい！司令官…：…んんっ、ふう〜」

「…司令官が鎮守府に着任しました！これより艦隊の指揮に入ります!!」

知らない傷跡 【提督 side】

「あれから約二ヶ月が過ぎ…。

怪我も今ではほとんど完治し、補助がなくなるとも歩けるまでになった。

現在は、執務室にて加賀と共に溜め込んだ書類などを全て片付けている最中である。

「提督…こちらの書類は全て纏めておきました」

「ありがとう。じゃあ、それはこっちに置いてくれ」

「分かりました」

俺は加賀に対して、この書類は自分が溜め込んだものだから自分一人でやる。と伝え、のだが…

「今の提督ではこの量をお一人で片付けるのには少し無理があるかと。それに…あなたはすぐ一人で抱え込んでしまう癖がありますし…周りの支えが必要でしょう？…あと、面倒くさがりな性格もありますし…」

そう言つて、加賀は自ら書類の片付けを手伝うようになった。

あれだけの苦痛を受けたのに、彼女は俺に向き合ってくれる。

「ならば、俺もそれに応えねば。」

その後も俺達は書類の片付けに勤しみ、昼前には何とか3分の2を片付けることが出来た。

「それにしても、加賀が俺に手を貸してくれたのは意外だった。」

吹雪や加賀本人から聞いた話では、俺は特に加賀に対しての暴行、性行為が絶えなかつたという。

「そこまでした俺に対して、加賀は…」

「貴方が良いのなら…その、もう一度、やり直しません…か」

やり直し…か。

加賀は今の俺をどう思っているのだろうか。

信頼していた人が急に人相を変え、無理やり暴行され無理筋な命令に従わされ…。かと思えば、また人が変わる。

普通であれば、不気味がるだろう。または拒絶反応を起こすか…。

どちらにせよ、憎むべき対象であるのには間違いないだろう。

なのに、彼女はこんな俺に対して自ら手を差し伸べてくれた。

加賀自身、何かしら思う所や理由があるのかもしれないが…。

むう…分からん。後で話を聞いてみるか？

「…？提督…手が止まっていますか…」

「ああ、いや…すまん。少し考え事をしていた。…。」

いかん、手が止まっていた。

早く終わらせて、昼食時にでも加賀を誘ってみるか？

何かしらの理由が聞けるかもしれん。

…。いや、やめておこう。今はまだ、周りの目もあるからな。

彼女達からすれば、俺はこの泊地の裏切り者。

実際、未だ和解したものは加賀を始め、吹雪や潮、…それくらいか？

天龍はあれ以来会っていない。

あの時の天龍の顔…あれは憎しみ以外の何物でもない。

…そりやそうか。あれだけの愚行を繰り返した本人が、記憶が無いときた。

誰だつてそんなタチの悪い者の味方なんてしないだろう。

今更思うが、取り返しのことばかりを俺は彼女らにしてしまった。

信頼を取り戻すのも、そう上手くは行かない…よな。

―あの時だつて…

俺はこの二ヶ月間、自身の治療に専念しながらも鎮守府内の艦娘ら数人と対面し、これまででの不当な行いについて謝罪をした上で、犯した罪を償うことを誓った。

しかし、彼女らの殆どはそれだけ聞くと直ぐにその場から立ち去ってしまった、結局返答は得られなかった。

「…司令官。…ま、まだ数日しか経っていませんからあまり無理はしない方が…」

そう言つて吹雪は俺の背中を支え、部屋に戻るよう促した。

「いや…しかし、俺はお前達に…ぐっ…!」

あの一件から俺は直ぐにでも彼女らに謝罪をしようと思つて居たが、未だ治りきつていない身体で艦娘寮に赴く。

おぼつかない足取りではあつたが、何としても自分の気持ちを伝えたかったのだ。

「ですが…」

「すまない吹雪…。あと一人…会つておきたいんだ。…頼む」

吹雪が俺の言葉を疑問に思いながら、艦娘寮に設置されてある立て看板を見た。

「あと一人?…ま…まさか!駄目ですよ司令官!…今度こそ本当に殺されちゃいますよ!」

そこには【戦艦専用】と書かれていた。

そう、俺が会いたいその人物。

かつて、世界第七戦艦「世界のビッグ7」と呼ばれた大型戦艦である長門とともに、大日本帝国海軍の象徴として日本国民から親しまれた。

Ⅰ 戦艦『陸奥』

彼女は長門型戦艦の二番艦としてこの佐伯湾泊地に着任した。

常に姉である長門と行動を共にしており、どちらか1人でも単独で行動しているところを俺を含め、周りの者たちは見たことがないくらいだった。そんな彼女、陸奥はその容姿や性格から長門とはまた別のリーダーシップを持ち合わせ、この泊地の艦娘を上手くまとめあげていた。

この泊地の全艦娘は54人。

戦艦を始め、空母や重巡、軽巡、そして駆逐艦に潜水艦。数は少ないが、補給艦なども存在している。

また、日々の戦闘や作戦には参加していないが、給糧艦などもこの佐伯湾泊地には存在している。

「いや、存在して」いた」のだ。

「…実際それだけの艦娘がこの佐伯湾泊地に居たはずなんだが…」

「それも全て…俺の…」

「…司令官…」

俺が意識を取り戻した後、吹雪らに現在の佐伯湾泊地にて確認が可能な艦娘の数を報告して貰ったところ、俺はその数に驚愕した。

確認可能な数―22名

それはこの佐伯湾泊地において、半数以上の艦娘が居なくなったことを指す。そして、居なくなった者たちの詳細を吹雪は続けて報告した。

轟沈―21名

解体―10名

不明―1名

俺はその数の多さに驚愕：どころの話ではなかった。

自身が犯した罪の重さに危うく潰されるところであった。

記憶が戻らない以上、自分がどのようにして彼女達を追い詰め、どのような仕打ちをしてしまったのかは、吹雪や加賀の話を聞く他に詳しく知ることが出来ないのが現状である。

だからこそ、俺は彼女達と会って話がしたい。

そして、問いたい。

「俺はお前達に何をしたのか」

だが、きつとこう返されるだろう。

「それを知つてなにが変わるの？」

そうだ。それを知つたところで何も変わらない。

俺が…。自分が犯した罪を知るだけで、お前達が受けたその傷跡は…俺という存在がいる限り消えないのかもしれない。

…一生背負つていくのかもしれない。

―果たしてお前たちの記憶の中では、俺はどのように映っているのだろうか。

優しい提督か、怖い提督か…あるいは憎い提督か。

…兎に角、傷跡は消えない。これは間違いないだろう。

しかし…、俺の記憶からはお前達の絶えない笑顔や楽しそうな表情が消え去ることはない。出来ないんだ。

…だから、俺はそれが余計に辛い。

「吹雪…あと少しだけ、付き合つてくれるか？」

目の前に居る彼女もまた、…以前までは自然な笑顔が絶えなかつたはず。

でも今の彼女は…まだ何処か不安が拭えないような表情ばかりしている。

「…は、はい…司令官が言うなら仕方がないですね！」

「ああ、そうか。」

「お前達にとって、俺はもう…」

『大切な家族』ではないのか。

何一つ不自由のない生活、将来へと導いていく。それが提督の仕事であり、上司として、家族としての役目。

俺はそれを果たすことが出来なかった。

…父親失格、だな。

「結局この日、俺は陸奥と話すことさえ叶わなかった。」

「司令官！昼食を持ってきました！」

「ヒトフタサンマル」

俺と加賀が溜め込んだ書類を全て片付けた後、吹雪と潮が執務室に昼食を届けに来てくれた。

今日の昼食は山菜と魚の天ぷら、味噌汁、そして少し冷めたご飯。

「あ、あの提督…、これも、どうぞ！」

「そうやって潮が差し出したのは、牛乳を寒天のように固めて作ったデザート。」

「ほう…牛乳寒天か」

「は、はい！」

これは間宮が作ってくれたのだろうか？

― 実の所、直接的な関わりは未だ無いが、最近の間宮が朝昼晩の食事を作ってくれるようになった。何故急に作ってくれるようになったのかは分からないが、少しだけ距離が縮まったようで内心嬉しかったりする。

「…いただきます」

まずは、魚の天ぷらを頂いてみる。

サクッ

ほんの少し塩気がする天ぷらは魚の旨味を上手く引き出しており、食感もサクサクとして食べ応えのあるものであった。

「…美味しい」

その後も箸が進み、あっという間に完食した。

…後はデザートを残すのみとなってしまうた。

「…さて、牛乳寒天も頂くか」

「提督！その寒天、すごく美味しいですよ！」

そう言って吹雪は腕を上下に振る。

潮もまた、首が取れるのでは無いかと心配になるほど頷く。

「そ、そうか…それは楽しみだ」

そうして、スプーンで寒天をすくい上げる直前で、俺はふと気付いた。

…何だこの紙。

牛乳寒天が添えられた小さなグラスの下に皿があるのだが、その隙間に綺麗に折られた紙が一つ挟まっていた。

俺はその紙を指で挟むと、机の棚の隙間に差し込む。

…誰か俺に伝言でもあるのか？それとも脅迫状か？

どちらにしても、後で確認しておかないとな。

ー牛乳寒天…すごく美味しかったです。

ー ヒトサンマルマル

昼食を食べ終わった後、俺は先程の紙を棚から引き出し、折られた紙を綺麗に広げる。内容はこうだ。

『提督へ

本日の深夜、マルヒトマルマルにて食堂へおいでなさって下さい。お待ち

しております。』

文章としては二行と短いが、その綺麗な字は明らかに大人が書いたものであり、内容からして間宮本人で間違いないだろう。

それにしても、間宮が俺に手紙とは…。

最近の間宮の行動と言ひ、この手紙と言ひ何か伝えたいことがあるのか。

…取り敢えず、本日の深夜…マルヒトマルマルに食堂か。

…少しだが緊張してきたな。

この二ヶ月間、泊地の艦娘達と対面してきたが、誰一人としてまともに話さえ聞いてくれなかった。

ある者は、俺を見るだけで拒絶反応を起こし。

ある者は、俺を殺そうとしてきた。

そしてある者は、泣き喚いて部屋から出てこなくなった。

俺を殺そうとしてきた艦娘については、リミッター制御装置が作動した他、吹雪が抑えてくれたおかげもあり事なきを得たが、あの時は本当に危なかった。

…これが、俺自身がやってきた行いの結果…か。

― マルヒトマルマル

さて、あの手紙に書かれた約束の時間だ。

俺は執務室を出ると、忍び足で別館にある食堂へと足を進める。

この時間帯は、皆就寝しており館内には自分の小さな足音と心音だけが聴こえる。

そして、無事に食堂へと辿り着き少し古びた扉を開ける。

…中には綺麗に整頓された机や椅子の他、小さな花瓶が何本か置かれていた。

「…ん？…厨房に居るのか？」

辺りを見渡すと100人は座れるであろう広い食堂の中、一つの空間にだけ明かりが出来ていた。

俺がその明かりに向けて進んでいると、懐かしいような良い匂いが漂ってくる。

…この匂いは…カレーか？

食堂を突き抜けると奥には厨房があり、近づくにつれてカレーの匂いが強くなっている。

そして…

「…よ、よう間宮」

暖簾をくぐると、そこにはあの時と変わらない表情をした間宮が立っていた。

「いらつしやいませ。甘味処『間宮』へようこそ！」

∴
提督！

消えゆく信頼 【艦娘 s i d e】

あの一件から数日が経過した。

私が意識を失った後、天龍さんや潮ちゃんら数人が、司令官を治療室へと運び出し、急手当を施した。結果、司令官は何とか一命を取り留めた。

幸い、鎮守府から数キロ圏内で十分に処置が可能な病院が数件確認された為、泊地の憲兵によって司令官は直ちに病院へと搬送された。

その後、司令官は泊地へと無事に帰され、現在は私たちが身の回りのお世話を担当している。

「司令官…まだ目を覚まさないんでしょうか」

私は今、食堂にて昼食を取っている最中である。

隣には潮ちゃんと夕立ちちゃんがちよこんと座って、私と同じく昼食を取っている。

「…き、きつと、大丈夫ですよ！お、お医者さまも、安静にしていれば大丈夫だって…きつと…。…提督」

潮ちゃんは初めこそ確信を持って『大丈夫』だと言いきるが、まだ不安が残っているのか段々と声が小さくなっていく。

「…てーとくさん」

夕立ちちゃんは野菜が盛られたお皿を見つめながら、そつと司令官の事を心配していた。

夕立ちちゃん…ずつと司令官の事を心配して…。

実は、司令官が病院へと搬送された日から夕立ちちゃんの様子がどこかおかしいのだ。

主に私と潮ちゃんが司令官のお世話をしているのだが、夕立ちちゃんは司令官から距離を取って治療室の窓からじつと様子を見つめていた。

ーそれが毎日。

この佐伯湾泊地で夕立ちちゃんだけが唯一、あの優しい司令官が戻ってくる事を信じて地獄の日々を過ごしていた。

いくら司令官から罵詈雑言を浴びせられようが、どれだけ暴力を振るわれようが、夕立ちちゃんは目に涙を浮かべながらも元の司令官が戻ってくる事を信じていた。

まだ司令官が優しかった頃、私と夕立ちちゃん…今はここには居ないが、睦月ちゃんの3人はよく司令官と遊んでいた。

海沿いで追いかけてっこをしたり、小さなカラーボールを投げ合ったりもした。

…あの頃は本当に楽しかった。

特に夕立ちちゃんは司令官の事を一番好んでいた。

…『懐いていた』と言った方が合っているのかもしれないが…。

いつも「てーとくさん！夕立と遊ぶっぽい！」と言って、執務室で作業をしている司令官の膝の上で、小犬のようにゴロゴロと動き回っていた。

司令官は、「困ったな」と言っただような表情で夕立ちちゃんの頭を撫でながら作業を続けていた。

―これが本来の『佐伯湾泊地』

「夕立ちちゃん！大丈夫だよ！司令官を信じよう？…ほら、私の竜田揚げ！分けてあげる！これで元気だして！…ね？」

私は夕立ちちゃんを少しでも励まそうと、今日のメインである竜田揚げを分けてあげる。

すると、夕立ちちゃんに少しだけ笑顔が戻る。

「…ありがとうっぽい！」

お礼を言いながら、夕立ちちゃんは竜田揚げをこれでもかと言うくらい頬張ると「ん！美味しいっぽい！」と言って私にとびっきりの笑顔を見せた。

―司令官…大丈夫かな。

私が一番、司令官の事を心配しているのかもしれない。

私たちが昼食を食べ終わる頃、一番奥の列に座っていた五航戦の瑞鶴さんが椅子をガタンツと鳴らしながら立ち上がってこんな事を言った。

「翔鶴姉え！やっぱアイツは信用ならないわ！」

そう言つて瑞鶴さんは、机を叩きながら姉である翔鶴さんに訴える。

一方で翔鶴さんは、瑞鶴さんに落ち着いてもらおうと必死で宥めていた。

「まあまあ、落ち着きなさい瑞鶴。…こんな所で怒つていても何も変わらない。…でしよ？…今は、みんな混乱しているはず。…私だつてそう。…まだ実際には会つていないけれど…あの提督が…」

翔鶴さんの言う通り。

ここに居る皆、この現状に混乱しているのだ。

あの怖かった司令官が、あの憎たらしい司令官が…

…前の司令官に戻るなんて。

誰もが予想していなかった事態に今、私たちは直面している。

「…翔鶴姉えも、アイツに数え切れないほど酷いことをされたでしょ？…だつたら！」
皆、不安や怒りを募らせているのだ。

信頼していた人に裏切られ、貶され…拳句の果てには捨てられ。

…仲間を失い、次は自分の番だと。

皆、常に恐怖と隣り合わせで生きてきた。

「…確かに、今の提督はどうか知らないが…、俺たちが受けたこの傷跡は…辛い記憶は…一生無くならない」

私たちの後ろの席に座っていた天龍さんがザツと立ち上がり、この食堂に居るみんなに聞こえるよう、こう呟いた。

「…みんな、あの時の提督の言葉、覚えているか？…『お前達は俺の大切な家族だ』。…まあ、殆どの奴は忘れたかもしれねえが、アイツはそう言った」

天龍さんの一言で、今ここに居る全員が顔を下に向けた。

…『大切な家族』

「アイツはそう言っただけで、俺たちを裏切った。…結局はアイツにとって、俺たちはただの道具に過ぎなかったってことだ。なあ、雪風？」

そう言っただけで、天龍さんは隣の席に座っている雪風ちゃんに呼びかける。

雪風ちゃんは、一瞬ビクツと肩を動かして下を向いたまま目に涙を浮かべる。

「みんなも分かっているとは思いますが、こいつの姉妹は全員！…アイツによつて解体された。…陽炎、不知火、親潮、早潮、天津風、時津風、浦風、磯風、浜風、谷風…10人だ。…何故あいつらが解体されたと思う？」

皆、その理由はもう既に分かっていた。

…聞かなくとも、私たちはこの目で見たのだ。

「そう…：アイツは自身の私利私欲を満たすためだけに、こいつの姉妹に手をかけた。…なあ、何処に自分の家族に手をかける奴がいるのか？…何処に自分の家族を解体する奴がいるのか？」

天龍さんの言っている事は事実だ。

私もこの目で、実際に見てしまったのだ。

あの優しかった娘が…、あの元氣いっぱいだった娘が…。

…目の前で解体されるところを。

「俺はあの時、どんなに悔しかったか…。目の前であいつらが解体される姿を…。俺らは見ているだけで、何も出来なかった！」

「…ひぐつ、…っ！…ひっ」

ガタツ

突然、隣に座っていた雪風ちゃんが泣き始めたと思えば、椅子から立ち上がりそのまま逃げるように食堂を去っていった。

厨房でこれらの話を聞いていた間宮さんも、出ていった雪風ちゃんの後を追うように食堂の扉を開けて出て行ってしまった。

「…天龍、あなた少し言い過ぎでは？」

先程まで、同じく話を聞いていた加賀さんが天龍さんに注意を促す。

「ふんっ…俺はアイツの事なんざ信頼なんかしちやいねえぜ？…あんたと違ってな」

天龍さんは加賀さんの注意をそのままに、腕を組みながら加賀さんを睨む。

加賀さんは、少しの間自身の胸元を見るとこう呟く。

「私が信頼しているのは、今の提督。…天龍、あなたは過去の提督に囚われているんじゃないかしら？」

そう言つて、加賀さんも天龍さんを睨み返す。

そして…

「あの時、…何故あなたは提督の事を助けたの？…私が提督を殺しかけた時。…何故あなたは必死で、提督の名前を呼んでいたのかしら？」

「!？」

加賀さんの一言に天龍さんは一瞬たじろぎ、こう返す。

「…あ、あれは提督が…！…つく」

すると、天龍さんは「…ふんっ」と鼻を鳴らして急ぎ足でその場から立ち去ってしまった。

…食堂内に流れる一時の静寂。

加賀さんはそのまま元の座っていた場所まで戻ると、普段と変わらない表情で食事を再開する。

それにつられて、周りの者たちも全員行動を再開する。

五航戦の瑞鶴さんは、流れる雰囲気気まぐらな残りのおかずを急いで食べ終えると、そのまま厨房へ食器を戻し食堂を後にする。

私は今の提督と過去の提督：どちらに囚われているんだろう。

二ヶ月後

あの後、司令官は無事に目を覚ました。

一時はもう目を覚まさないのかと不安に苛まれていたが、体は思ったよりも元気そうでも私も潮ちゃんも、そして夕立ちちゃんも少しだが安堵の表情をよく見せるようになった。

しかし、司令官は精神面で少し不安が残っている。

―ある日、司令官が私に向かって今の佐伯湾泊地において確認が可能な『艦娘の数』を報告して欲しいと頼んできたのだ。

：私は一瞬、報告すべきかしまいか、躊躇ってしまった。

何故なら、報告次第で司令官をさらに苦しめてしまうのではないかと不安がよぎった

からだ。

しかし、司令官の命令であれば報告するしかない。

私は、正直に現在の数を報告した。

―そして、司令官は報告を聞いてこう呟いた。

「それも全て…俺の…」

私は後悔した。

やはり報告すべきでは無かったと。

その日から、司令官は何処か遠くを見つめる事が多くなった。

…私もまた、そんな司令官を見て不安に感じる事が多くなった気がする。

―あの時のような笑顔をこの目で見られるのは、まだ遠く先の未来になりそうだ。

現在、私と潮ちゃんは間宮さんが作った食事を司令官の居る執務室まで運んでいるところだ。

この二ヶ月間、司令官はまだ治りきっていないその身体で、この佐伯湾泊地の数人に謝罪の意とその償いを誓った。

しかし、それらの殆どは聞く耳を持たれず、返答すら得られなかった。

それどころか、司令官が殺されかけた場面もあった。

瑞鶴さんが司令官に向けて艤装を展開し、爆撃機を射出する寸前でリミッター制御装置が作動したこと。

その後も瑞鶴さんが司令官に襲いかかろうとした為、同室の翔鶴さんと共に瑞鶴さんを取り押さえたことで、その場は事なきを得た。…が。

去り際の瑞鶴さんの一言で、司令官はさらに暗い顔を見せた。

「私たちの前から消えてっ！…アンタの顔なんか見たくないの！…全部…アンタの…！アンタのせいだ！」

—その時、私の記憶の中で何故か、司令官と瑞鶴さんが何処か楽しげに言い争っている場面を思い浮かべた。

『あゝー…ちよつと提督さん！これ、私が楽しみに取っておいた間宮さんの特製。パフェでしょ！…なに勝手に食べてるのよ！』

『…でもお前、今日寝坊したじゃん？…それは仕方ないとか。…んゝ相変わらず間宮が作った特製。パフェは美味しいなあゝ』

『うふふ…それは良かったです。提督』

『…ぐぬぬ。…今日は仕方なかったの！昨日の哨戒訓練と演習で疲れたの！…ていうか提督さんもいつも寝坊してるでしょ！…あつ、ちよつと全部食べないで！…私の分も残しといてよ！』

『ね、寝坊はまあ、仕方ないとしたか』

『さつきから仕方ないばかり！…コノヤロウ！』

『お前も仕方ないって言ってた…あつ痛い！瑞鶴！痛いから！…助けて吹雪！』

『…自業自得ですよ。2人とも…』

―それも今ではいい思い出…か。

そんな事を思いながら、私は今の司令官と瑞鶴さんを見る。

…何故こんな事になってしまったのだろうか。

司令官は歯を食いしばり、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

きつと、過去の瑞鶴さんと今の瑞鶴さんを重ねているのだろう。

…ここまで変わってしまった。

―何もかも。

コンコンコン

執務室の扉をノックした後、「どうぞ」と返事が聞こえてから入室し、私は元気よく食事を持ってきたことを伝える。

「司令官！昼食を持ってきました！」

見ると司令官はちやうど書類を片付け終わったようで、加賀さんにお礼を言いながら此方にも目を配った。

そして司令官は「ありがとう」と言いながら、今日の昼食を受け取る。

「あ、あの提督……、これも、どうぞ！」

私が司令官に食事を渡すと、潮ちやんも続いてグラスに入った牛乳寒天を差し出す。

「ほう……牛乳寒天か」

「は、はい！」

司令官は潮ちやんからグラスを受け取ると、少し頷いて何処か嬉しそうな表情を見せる。

…司令官、間宮さんが作った食事を楽しみにしたのかな？

最近、間宮さん本人から頼まれて司令官へ持っていくようになった。

何故、間宮さんが突然食事を作り出したのかは分からないが。

…多分、間宮さんも司令官の事が気になるのかな。

―その後、司令官は静かに「…いただきます」と言つて食事を始める。

こう見ると、司令官は本当に間宮さんの料理を美味しくそうに食べる。

…確かに、間宮さんが作った料理はどれも絶品である。

もしかすると、以前の司令官が間宮さんの料理をいつも楽しみにしていたから、だから間宮さんもそれを知っていて、こうして作っているのかもしれない。

「…美味い」

―その後も、司令官は間宮さんが作った食事を堪能し、牛乳寒天を何処か懐かしそうに食べるのであった。

後悔ばかりの日々 【提督side】

「いらつしやいませ！甘味処『間宮』へようこそ！…提督！」

暖簾をくぐると、そこにはあの時と変わらない表情をした間宮が立っていた。

「あ、ああ。…よう間宮、久しぶりだな」

確かに、実際こうして会うのは二ヶ月ぶりか…。

怪我が殆ど治り、俺が執務を再開した頃から間宮が食事を作ってくれるようになった。

「ええ…お久しぶり、ですな」

そう言つて間宮は、俺の事を懐かしそうに見ながら微笑んだ。

「…」

両者に流れる、沈黙

俺は少し気まぎれになり、視線をあちこちへ移しながら下を向いた。

対して間宮は、じつとコチラを見ながら少し間を置き「ほっ…」と息をついて安堵の表情を見せた。

俺もその姿を見て、体中の緊張が一気に解けたような気がした。

そうして俺たちは、間宮の「少しお話しをしませんか？」という案で、これまでに起きたことや俺自身の事について話をする事になった。

「そう…記憶が」

間宮との会話の中で、まず俺の記憶の事について話をした。

一年半前からの記憶が全く無いこと。

佐伯湾泊地が所謂、ブラック鎮守府になっていたこと。

そして…

それは、俺自身が原因であるということ。

何度思い返しても、俺には笑顔が絶えないあの頃の佐伯湾泊地での記憶しかないのだ。

毎日…四六時中思い返しては、やはり戻らない記憶に歯痒い気持ちでいっぱいになる。

ここ最近、睡眠もろくに出来ず、睡眠薬を服用しなければ寝られない日々が続いていた。

目の下にはくつきりとクマが出来ており、髪もボサボサとして無精髭を伸ばしていた。

到底、艦娘を指揮できるような状況ではないと言う事は、俺自身理解していた。このまま艦隊指揮をしたとしても、最悪沈めてしまう可能性だつて十二分にある。

幸い、ここ最近では深海棲艦の活動も減少傾向にあり、鎮守府正面海域での近海警備を実施してはいるが、イ級数体と主力艦隊らしき姿は目撃されない。

「…」

俺が話を終えた後、少し考えたような仕草をして間宮がこう呟いた。

「…そうですね。確かに、今の状態では艦隊の指揮を執ることは厳しいでしょうね。提督がそのような様相を帯びていれば、私達艦娘は作戦に専念する事が出来ない。そして、提督自身も艦娘との間にできた壁によってコミュニケーションを怠る。結果、戦況の把握から進撃か撤退か…その選択を誤る可能性だつて有り得ますから」

…やはりそうか。

では、どうするべきか。これ以上、何も行動を起こさないとするのは艦娘にとつても、俺自身にとつても良い事とは思えない。

それは、提督と艦娘という関係に更なる亀裂を生じてしまう恐れがある。

「…ですが提督、今はそれでも良いのではないのでしょうか？もちろん、私達艦娘のケアは

必要不可欠、優先的に行ってください。ですが、艦隊の指揮を執るのはその後でも遅くはないでしょう。先程の話でも出しましたが現在、深海棲艦による侵攻も確認されていますし、近海での活動も減少傾向にあります。ですので、それよりも今はこの泊地の現状を変えていきましよう。少しずつ、でも着実にやっていきましょう」

間宮は「ふう…」と、一息つきながら此方を向き、真剣な眼差しで話を続けた。

「先程の提督が仰っていた事が事実なのであれば、提督のその『記憶』というものは、いくら思い返しても取り戻す事は不可能なのではないか、と私はそう感じています。…断言は出来ないですけどね?」

記憶を思い返すことは不可能…?

「これは私の勝手な考え、予断のようなものと捉えていただいても構いません。…宜しいですね?」

そう言つて、間宮は話を始めた。

…提督の様子がおかしくなったのは一年半前、私はそれまでの提督とはこうして、よくお話をする仲でした。…しかし、私がその時に感じ取った提督の雰囲気はまるで別人

が乗り移つたような、そんな気がしました。

いつも面倒くさそうにしている提督。でもそれ以上に優しく、近くにいただけで心が温まる。そんな提督が一変、冷酷かつ残酷な性格となり、この泊地に所属する半数以上の艦娘を沈めて行つた。

私は給糧艦であるため、非戦闘員として日々この佐伯湾泊地を影ながら支えて来た。私はその役目に一つの誇りを持つていた。

しかし、ある日から全てが変わつた。

毎日誰かの泣き叫ぶ声……。それはもはや声とは思えないような呻き声など……。果たしてここは本当に佐伯湾泊地、この国を守護するという目的の為に置かれた場所なのかどうかさえ判別することが出来ない。まさに地獄という言葉がお似合いの場所へと置き変わつていた。

さて、そんな様変わりしたこの泊地の、私達の指揮官である提督。『神永隼人』は、一つの癖？ 提督によると「俺独自の深呼吸の仕方」という仕草がよく見られた。

指と指を合わせながら深く深呼吸をする。

その動作を何度も行うことによって、心の乱れを無くしていく事が可能になるのだと言ふ。いつも、指揮を執る前はこの仕草をして心を落ち着かせていた。

確か特型駆逐艦の吹雪ちゃんも提督から教えて貰い、とつても嬉しそうに同じ事をし

ていたのを微笑ましく見ていたものだ。

そんな提督の仕草は、私が見たところ一年半前から先程までは一切行われていなかった。これは断言出来る。

そして、今日の前の光景で確信した。

その仕草を今、現在進行形でやっているということ。

…そう、つまり。

「提督…やはり戻ってきて下さったんですね」

俺は無意識のうちに、いつもの深呼吸をしていた。

「はあ…はっ、ああ」

間宮が俺の背中を優しく擦りながら、湯気がユラユラと立ちのぼる緑茶を差し出した。

俺はその緑茶を何分、何十分もかけて飲み干していった。

「…ふう、…すまん、間宮。大分落ち着いたよ」

間宮のおかげもあり、先程までの焦りや不安などという感情は徐々に消え去っていつ

た。

「提督は昔から、温かい緑茶が好きでしたよね？」

「…ああ、そうだな」

そう呟きながら、間宮は間を置いて「では、話を続けますね」と、先程の話の結論を述べた。

「私はこう思うのです。…今の提督と、一年半前の提督は…全くの別人。もしくは、二重人格のような提督の裏側にある者なのでは無いか？…と」

…俺が二重人格？

信じたくは無いが、実際このような現状でそれを否定するのは烏滸がましい。

俺の中にあるもうひとつの人格。それがもし、本当に存在しているのであれば、またこの泊地の艦娘に危害を加えるだろう。

そうなった時、俺は…今の俺はまたやり直せるだろうか。

艦娘は、…目の前にいる間宮は、俺をどう思うのだろうか。

「…間宮、その。…間宮は今の俺をどう思っているんだ？」

俺は飲み干して空になったコップを見つめながら、そんなことを聞いた。

間宮が言う俺の二重人格に対して、今のところ対抗策はゼロだ。

この泊地の現状を見ても、未だ艦娘達には信用どころか話すら聞いて貰えない。

そんな俺を見て、目の前の間宮は…、吹雪、潮や夕立…加賀は。
…どう思うのだろうか？

「…提督。私は、今の提督が好きです。…寝坊は当たり前ですし、書類も面倒くさがって結局大淀さんに怒られて…ふふっ」

そう言い、微笑みながら間宮は俺の手を握った

「…でも、提督。私は、私達艦娘は…そんな提督が大好きだったのですよ？いつもにこやかに笑って、とっつても優しく暖かくて。…瑞鶴さんとの何気ないケンカは、私の心を穏やかにしてくれます。瑞鶴さんも、いつもキラキラしながら提督の話をしてくれるのですよ？ふふっ…きつと、周りの皆さんもそうだったのではないかと、…そして、そんな提督を見て天龍さん、雪風ちゃんも…。よく笑っていたのですけれどもね…」

「そう…か」

俺の想い出には…いつも元気な艦娘の姿が見える。

「提督！いつまで寝ているのですか？書類もこんなに!!キーン!!」と、いつも怒鳴りながらも深夜遅くまで手伝ってくれるとても頼りになる彼女

「爆撃するわよ!」と怒ったようでも何処か楽しそうな顔をしている彼女や、世界水準を軽く越え、「硝煙の匂いが最高だなあオイ!」とその手に持つ刀でイ級を真つ二つにする凄

い彼女。

：いつもキラキラした笑顔を周囲に振りまき、「絶対、大丈夫！」と、幾つもの幸運も見せた彼女…。

そして、そんな幸運艦の彼女の姉妹達。

：10人

もう過去へは戻れない。

沈んでいった彼女達、解体によつてこの世から消えた大切な家族。

紛れもなく、俺自身がやった事だ。

提督として、上司として、そして父親として。

俺はこの佐伯湾泊地の艦娘を導いていくと決めた。

面倒臭がりな性格故、至らぬ所が多々あつたとは思うが、俺なりに頑張つてきたつもりだ。

そんな俺が…彼女達に…。

「なあ、間宮。俺は…これからどうすればいいと思う？また今の俺とは違う人格が出てきて、お前達に危害を加えるかもしれない。…今でさえこんな寝た姿。そんな提督を見てお前達は、どう思う。…憎いやつか？怖いやつか？…もう俺は…お前たちのかぞつ

…」

『お前達の家族では無い』と言おうとした時、俺の頬にガツンと来るような衝撃と共に痛みが走った。だが、その中に感じた温もりは一体。

「提督!…何故そのようなことを仰るのですか!!…先程も言いましたが、提督はこの泊地の指揮官です!!上司です!!父親です!!それは変わりません!…例え、貴方が大淀さんを殴り、そのまま海に沈めた人でも!雪風ちゃんの姉妹を全員解体した人でも!長門さんやこの泊地に居た艦娘を轟沈させた人でも…!」

そうやって、間宮は俺に少し冷めた緑茶を思い切り頭からかけた。

「貴方は提督あなたです…提督」

その時、俺はふと視線を感じた。

俺達の丁度後ろには、中の様子が見えるようにガラス張りになっている箇所があった。

俺が下を向いたまま、冷めた緑茶をかけられた姿を見て、その影は食堂の入口へと向かっていく。

そのまま、下を向いていると間宮がこう呟いた。

「…聞いていたのですね、夕立ちちゃん」

…ほい。

と、小さな声で弱々しく返答する夕立がそこに居た。

入口の柱に身体半分を隠し、チャーミングポイントである跳ねた髪も今では「しゅん……」としたような垂れた様子で此方を伺っていた。

「提督さん……夕立、もう家族じゃないっぽい？」

夕立はそう呟くと、目に涙を浮かべながら柱に隠れた。

俺はそんな夕立の姿を見て、あの時に誓った言葉を思い出した。

『もう一度やり直そう』

吹雪と誓った言葉。

加賀に言われた言葉。

俺は未だ、その言葉を実行に移せていなかった。

「……夕立。……ごめんな……こんな提督で……。情けない提督で……父親で！」

俺は徐々に覚めてゆく頭の中で、ある想いが溢れ出ていた。

着任したての頃は、初めての实战に緊張して上手く指揮ができず、近海であると言うのにも関わらず吹雪を大破にしまったこと。

もう慣れたと慢心しては、何回も道中で大破をさせ撤退を繰り返したこと。

ボスマスの戦艦ル級Flagshipに加賀を沈められそうになったこと。

いつも作戦が終了した後はこの場面はどうすれば良かったのか、どうすれば上手いくのか。そんなことを一人考えていた。

そういう時はいつも後悔をしていた。

そして、そんな俺を傍で支えてくれたのは紛れもなく彼女達、艦娘であった。

「…提督さん。…もう泣かないでっぼい」

そんな後悔をしていると、いつの間にか俺の傍に駆け寄り、少し湿った俺の頭を優しく撫でている夕立の姿があった。

マルフタサンマル

外から聞こえる鈴虫の鳴き声は、俺の今の心情を映し出しているようだった。

厨房の傍らには間宮が置いたのであろうか、紫色のアネモネという1本の花が花瓶に添えられていた。

2人で抱き合い、俺は鼻をすすり夕立は赤ん坊のように泣きじやくつていた。

それを見つめる間宮もまた、目に涙を浮かべ俺達の様子を眺めていた。

暫くして、夕立が泣き止み

「すんっ…ごめんな。夕立、でも…もう大丈夫だから」

夕立の髪の毛を解すように、優しく撫でていく。

「提督さん…。もう夕立を捨てないっばい？…怒ったり、殴ったりしないっばい？」

「ああ、もう夕立や吹雪、みんなに辛い思いはさせないよ。…絶対だ！」

俺は力強く、夕立に向かってそう放った。

「じゃあ、約束!!…指出してっばい！」

夕立は元気いっばいに言つて、俺に向かって小指を突き出す。

「間宮さんもやるっばい！」と間宮も誘い、3人で指切りげんまんと言いながら絶対に破る事の出来ない約束をした。

「次にこんな事したら、夕立はもう提督さんと縁を切るっばい!!約束は絶対っばい!!」

ああ、これは絶対破れない約束だな。

そんな事を思っていた、その矢先。

「じゃあ、オレもお前達に約束したいことがあるぜ？」

食堂の入口付近から聞き覚えのある声があった。

暗闇の中からこちらを見据えるその金色の瞳は、確実に俺の方へと向けられていた。

「…天龍」

こんな時間に何故…？

…いや、それは俺達も同じか。

「どうしたんだ…？何か用か…。っ！…天龍、あの時はすまなかつた。ありが…「おつと」

俺が一言、天龍にあの時のことについて謝意を述べようとしたのだが、

それを遮り、天龍はこう言い放つた。

「感謝なんて要らねえな…へっ！、どうせまたコロコロと変わる男だ。そんな奴に謝意を述べられたところで、ちつとも嬉しくなんかねえよ」

そして続けざまにこう言った。

「オレが言いたい事はただ一つ。お前ら『こんな奴とはもう関わるな』…いいか？これが約束だ」

その一言で次の瞬間、俺の隣に居たはずの夕立は気付いた時には天龍に向かって飛びかかっていた。

そのスピードは、敵の深海棲艦に襲いかかるよりも速く、そして確実に殺意を持って殴りかかった。

まだまだ、夜は明けそうにない。

彼女の眼帯 ① 【提督 side】

ヒトサンサンマル

この日は異常に暑い日だった。

壁に掛けられた気温計は今にも36℃に迫ろうかとしていた。

窓から射し込む陽の光が俺の背中を燃やし、執務室の机に陽炎のようなユラユラとした薄い影を作っていた。

そんな暑さに耐えながらも、俺はひたすらに筆を進める。

じわりと額から滲み出た汗は徐々に目元へと移動し、顎に差し掛かったところで遂に滴り落ちた。

「暑い」

「…」

俺の口から無意識に出たその言葉は、さらに俺自身を苦しめる結果になる事を自覚しながらも、最早口癖となっていた。

ふと喉が乾いたのを感じ、机の隅に置かれた茶飲みに手をかける。

暑い時には、キンキンに冷えた緑茶が一番だという事を俺は知っている。

…だが、触れた瞬間悟ってしまった。

「大淀、熱いよ」

「…提督は温かい緑茶がお好きでした、よね？」

「…」

若干大淀から圧を感じる気もするが、温もりを感じる茶飲みを手に持ち、少し間を置いてから背に腹は変えられないと一気に喉を潤していく。

喉の奥が煮えたぎるような感覚を覚えながらも、なんとか飲み干した。

「余計に暑い」

「…ええ、そうですね」

そんな俺を他所に、秘書官の大淀は汗ひとつ浮かべずに黙々と机に並べられた数え切れない程の書類に目を向けていた。

（艦娘も人間と同様に暑さを感じるらしいが、大淀は凄いな。

というか、この気温で汗をかかないのは逆に心配なのだが。そこら辺は、人間とまた違うのだろうか？）

「提督…、先程から筆が止まっていますか？」

「あっはい」

大淀からの圧が先程よりも増し、とてつもなく鋭い眼光で此方を睨みつけた。

『蛇に見込まれた蛙』改め『大淀に見込まれた提督』とはこの事か…と、萎縮した俺は直ぐに返事を返して、目の前にある書類の山を片付ける為に「…よし」と一言呟き、執務に取り掛かる。

ヒトハチマルマル

あれから四時間半が経過した。

俺が彼女に対して尊敬の念を抱いたのは言うまでもないだろう。

山のように積まれた書類は、大淀にかかれば朝飯前のようなだ。

(これからも仲良くしましょうね、大淀さん…)

…さて、執務が終了した俺は休憩がてら緑茶を嗜みつつ、机に置かれたひとつの書類に目を向ける。

大本営から近々、大規模作戦を展開すると言った通達を受けた。

既に決定事項であり、今回は日本国内にある全ての鎮守府や泊地に対してこの通達書を送られた。

「ふむ…。レイテ沖海戦…か」

「そうだ」

レイテ沖海戦…

史実でも、史上最大の海戦なり日本海軍の終焉を告げる戦いだとか言われているが…
敵味方合わせて一万を超える死者を出し、数多の艦艇を海の底に沈めた海戦であると
言う事は周知の事実。

（日本と米国…国同士の争いが終結したと思えば、今度は未知の存在である深海棲艦との争い…ね。今でも、国同士で争っている所はあるが、実際そんな事をしている場合じゃないんだけどなあ…

『一致団結』…簡単そうに見えて非常に難しいものだ。）

「…つて、長門…なんで執務室に居るんだ？」

「…？なんだ提督、先程から話しかけていたでは無いか」

（あれ、おかしいな。）

…いつから長門は執務室に居たんだ？

記憶が…少し曖昧だ。）

「そうだったけ？」

「…？提督…？大丈夫ですか？…きつと執務でお疲れになったのでしよう。夕食は此方

でお食べになって、今日はもうお休みになられた方がいいかと」

「いや、しかし…」

「提督よ、あまり無理をし過ぎない方が良い。以前もありもしない事を発言していたと大淀が心配していたぞ」

（確かに、ここ最近記憶が曖昧になることが多い気がするし…

おそらく日頃の疲れが溜まっているんだらう。

…ここはひとつ、甘えさせて頂くとするか。）

「分かった。それじゃあ大淀、後は頼んだ」

「はい」

そう言つて大淀は食堂へと向かつて行つた。

「それにしても提督よ、大本営からのその通達書。そこに記述してある内容。…恐らく今回は予想以上に厳しい戦いとなるだろう」

長門からそう言われ、改めて書類に目を通す。

フィリピン周辺の広大な海域を舞台に、今回の大規模作戦は展開される。

ここら一体は数多くの群島で構成された場所であり、別紙の報告書によると数年前から深海棲艦の目撃情報が増えていると報告があつた。

原因としては、無人島などの島から湧き出す無尽蔵の資源。

その資源を狙って深海棲艦がフィリピン海周辺に出現したのだが…

(なるほど、新種の姫が出た可能性がある…と。

確かに、これは一筋縄では行かないようだ。)

その後もスラスラと通達書やら報告書を読んでいると、一つの項目に目が行った。

(…ん？今回のレイテ沖海戦は横須賀鎮守府の主導なのか。

…あそこは良い評判を聞いたことがないが、果たして大丈夫なのか?)

横須賀鎮守府の提督である霜田傑提督。

彼は所謂ブラック提督として海軍内では噂されている。

艦娘に対して非道な行いをしているだとか、駆逐艦を盾や囮として突貫させ、敵が気を取られている間に戦艦で戦力を一気に落とす作戦『盾艦作戦』なんてものを実施したとか…

まあ、それはそれは恐ろしい噂があるようだ。

これは大本営で小耳に挟んだ話だが、海軍上層部は現在、二つの派閥で争っている

いう。

艦娘を人間または艦娘と言う存在そのものとして接する穏健派

それに対し：

艦娘を兵器または道具として扱う強硬派

対立する二つの派閥は、これから先の海軍の在り方について双方譲らない思想を押し付け合っているような話を聞いた。

そして、これらの対立は海軍内部では大きな問題となっており、いずれは海軍に留まらず、国内の問題にまで発展するなんて話も出てきているようだ。

実際、艦娘と言う存在に対して世間はあまり良く思っていないらしい。

未知の存在である深海棲艦が出現してから早数十年。

第二次世界大戦が終結し、戦後の日本は高度経済成長期を迎え、平和な世の中へと徐々に向かっていたはずだった。そんな日本、世界に突如として終わりが告げられた。

人々は絶望し、全てが奪われる恐怖に苦しみながらも一つの奇跡を願い、信じて抗い続けていた。

そしてその願いは遂に叶った。

深海棲艦に対抗するために現れた存在。

…そう、艦娘である。

艦娘が人類の味方であると言うのは、一目で理解した。

俺達人間と同じように言葉を介し、喜怒哀楽という感情を持っている。そして何よりも：俺達人間が付けた名を、彼女艦娘達は自ら名乗った。

―これで人類は救われる。

―もう大丈夫だ、艦娘が居てくれる。

―神様、仏様、艦娘様。

人々は、歓喜した。

人間と艦娘は共存できる。

一致団結して、深海棲艦を倒そう。

…そんな中、ある日から否定的な声が薄らと聞こえるようになった。

―艦娘は深海棲艦の刺客では？

―今は味方でも、いつかは裏切ってくるのよ。

―アイツら人間じゃねえもんな。

これらの声が出てきた原因として、マスコミの偏向報道やSNS上での嘘の書き込みなどが挙げられる。

…だが、俺はこう思う。

人は未知の存在に恐怖する生き物であると。
人としては頑丈過ぎるその身体。

幼い外見をした少女でさえ、屈強な男ら数人がやつとの思いで持ち上げた装備をいとも簡単に背負い…そして海上を舞うように駆け抜ける。

そして何よりも、兵器としての名残を残したその風貌。

この光景を目の当たりにして、果たして艦娘という存在を人として定義出来るのか？
人でないのならば奴らは、彼女らは一体何者なのか？

その疑問こそが、人間が最も恐れるものなのではないのか…と。

「…提督、どうかしたのか？」

「いや、少し考え事をしていただけだ。…気にするな」

「…そうか」

（あまり考え過ぎても、疲れるだけだ。

ゆっくり休んで、明日に備えよう。）

マルハチマルマル

今日も寝坊をかましてしまった。

大淀に叩き起されてから数分後、二度寝を執行しようとした俺の腹に、夕立アタックが炸裂して数分その場から動けなくなった。

…今日もいい目覚めだ。

(はてさて、いい目覚めなのはいいが…)

「こらー！夕立！提督さんに引っ付いてばっかり！提督さんが困つとるじゃろ！」

「ぼーい！提督さんのお膝は夕立の特等席っぼーい！」

「うー…、夕立だけズルいよ。あたしもしれえになでなでして貰いたーい」

「雪風もしれえの隣がいいです！」

(うーむ…これは困った。)

朝食を摂るため、ひつつき虫のように回って回る夕立と共に食堂へと向かったのはいが、丁度陽炎型姉妹が食事をしていたので。

その他にも数人艦娘が居たのだが、雪風を始め時津風が俺の袖を引っ張りそのまま席に座らされた。

「あくはいい。よしよし」

「えへへ！しれえのなでなで好きー」

「しれえ！雪風もなでなでして下さい！」

（こうしていると、昔飼っていた犬のポチを思い出すな。）

アイツもこうして撫でてやると、しっぽを大きく振って喜んでいたものだ。

「いいわね、若いって」

「…陽炎姉さん、姉さんも十分若いだろう？…なあ、浜風」

「磯風…多分そういう事じゃないと思うぞ」

「…そうなのか？」

相変わらず磯風は天然なところがあるが、そこも含めて彼女の魅力だと思っている。

いつも暴走した時は、浜風がストッパーとなっているのはお約束。

「よっ！提督は皆から人気だねえ！」

「谷風ー！あたしも提督とお話がしたいー！」

（谷風と早潮は毎日元気だなあ。）

「落ち着きなさいな早潮…まあ、でも確かに羨ましいわね」

「天津風もたまには司令に甘えてみるのもいいと思いますよ？」

「…うう。そ、そういう親潮はどうなのよ…」

「私は、司令に褒めていただけのならそれで十分です」

ふと天津風がこっちを見たと思えば、直ぐに視線を逸らして下を向いた。

(…俺のことがそんなに嫌いだったのか天津風。

一体俺の何処がいけなかったんだらうか。…今度、話にでも誘ってみるか。
お悩み相談会なんでも面白そうだしな。)

さて、話題は一転するが、ここでひとつ気になる事がある。

それは最近天龍を見かけない事だ。

この時間帯であれば、駆逐艦を引き連れて朝食を摂っていたはずだが…

「なあ、最近天龍はどうしているんだ？この時間にいつも朝食を摂っていたらどう？」

「天龍さん？…あー最近、屋内演習場に入り浸っているみたいね」

「屋内演習場？」

(確かにこの泊地には屋内専用の演習場があるが、それにしても唐突すぎやしないか？

まあ、天龍も更に強くなりたいたいか意気込んでいたから、納得だけど。)

そういうえば…以前こんな事があったな。

中破に追い込んでいたとは言え、戦艦ル級を刀で真つ二つにしたと報告を受けた。

その時は思わず緑茶を吹き出したものだ。

その話題を本人に振ったところ、「フッフ、怖いか…」と何処か自慢げに呟き、俺は思わず首を縦に振ってしまった。

その際に、周囲で本を読んでいた駆逐艦の数人が泣いてしまい、数日間本気で怖がられていた時は流石のアイツも参っていたな。

(…あまりのショックで天龍が号泣して、妹の龍田に膝枕で慰めて貰っていたのはここだけの話。)

「不知火は確か、以前天龍と一緒に近接戦の鍛錬をしていたよな?」

「…はい、天龍さんからお誘いを頂きました」

不知火も何気に近接戦が得意らしく、天龍と共に敵の駆逐艦を殴り殺していた気がする。…その真顔で殴られたらどれだけ恐ろしいのか。

(…ん?というか、以前は一緒にやってたけど今はどうなんだろうか?)

「不知火、今は天龍と一緒にやっていないのか?」

「…」

俺が一言言うと、不知火は備え付けの人参をモソモソと食べだして、そのまま黙りこくってしまった。

(…まずい、怒らせてしまったか?)

不知火って怒ると怖いイメージがあるからなあ。」

「…あーその事なんじゃけどね?…実は天龍さんが一人で鍛錬したいみたいで…断られたみたいじゃね」

「…なるほど」

(これは、その…)

なんと言うか…)

「…不知火」

すると、いつもポーカーフェイスで余り感情を表に出さない不知火の表情に変化が表れ始め、遂にははしかめっ面になったかと思えば、瞳から涙が零れ落ちた。

「…司令…し、不知火に落ち度でも?」

(やばい、不知火を泣かせてしまった。)

こ、ここのう時はどうすればばばば…)

「あく!しれえが泣かせたー」

「しれえ!酷いです!」

「提督さんが不知火を泣かせたつぼーい!」

(うげえ…!?)

もしかして地雷を踏んでしまったのか?

まさか泣いてしまうとは思わなかった…)

「司令…この磯風、流石に失望したぞ」

磯風からの追い討ちによってさらに焦ってしまふ。

(…あ、焦るな俺…こういう時は深呼吸だ。一旦落ち着こう。)

「すう…はあー」

(よし、大丈夫だ俺。)

きちんと謝って、しっかりと慰めよう。)

「すまない不知火…お前を傷付けてしまった…この通りだ。…許してくれ」

不知火に何をされるかたまったもんじやないと、少しの恐怖心を抱きながらも、俺は

机に額を擦り付けて謝罪をした。

「…ぐ、ぐすつ…い、いえ…此方こそすみません」

(一応、許されたのか…?)

それなら良いが…)

「そ、そうか…まあ、なんだ。…それで、恐らくだが天龍も不知火を嫌って一人で鍛錬をしたって訳ではないと思うんだ」

あの天龍が、なんの理由もなしに仲間を傷付けるなんて事をするはずがない。

俺はそう確信している。

(…恐らく、一人でやらなければならぬ理由があるのだろう。)

「今日中にでも天龍と話してみるよ。アイツにも悩みの一つや二つあるだろうし」

「…分かりました。すみません、司令」

「いや、これも父親としての義務だろう。お前らは俺の大切な家族だからな」

そう言つて不知火の頭を少し乱雑に撫でてやると、少し目を細めて恥ずかしそうに下を向いた。

(…意外と素直なんだな。)

てつきり嫌がると思つたが、不知火ほどのお年頃はまだまだ甘えたい時期なのだろうか。)

―不知火に対しての印象が変わつたひと時であつた。

その後、朝食を食べ終えた俺は未だ引つ付いてくる夕立に加え、何故か鼻歌を歌いながらスキップをして追いかけてくる時津風、雪風を横目に、執務室へと戻つて行つた。

その道中、何処か寂しげに佇んでいる龍田を見つけ話しかけてみた。

「よう、龍田。どうしたんだ？ そんな寂しい顔をして」

「提督…、私はもう必要ないのかしら」

（これはこれは…）

…何か訳ありって感じだよなあ。

まあ、何となく見当はついているが。）

「…天龍と何かあったのか？」

「…！…え、ええ…実はそうなのよ」

そう言って龍田は、事の発端を話し始めた。